

	〈ミッション：インポッシブル〉イン大谷大学 ——「浄土真宗の学場」ということ——	1
目 次	2010(平成22)年度「指定研究」研究組織一覧	2
	2010(平成22)年度「指定研究」研究目的紹介	4
	2010(平成22)年度「一般研究」研究組織一覧	9
	2010(平成22)年度「一般研究」研究目的紹介	11
	海外研究調査報告	18
	国内研究調査報告	21
	学術交流協定締結	22
	公開講演会報告	24
	研究成果報告会	26
	特別研究員研究成果報告	28
	兼報	31

研究所報

〈ミッション：インポッシブル〉イン大谷大学 ——「浄土真宗の学場」ということ——

学監・文学部長 教授 門脇 健

本学初代学長・清澤満之が「開校の辞」で次のように述べているのはよく知られている。

「本学は他の学校とは異なりまして宗教学校なること、ことに仏教の中において浄土真宗の学場であります。即ち、我々が信奉する本願他力の宗義に基づきまして、我々において最大事件なる自己の信念の確立の上に、その信仰を他に伝える、即ち自信教人信の誠を尽くす人物を養成するのが、本学の特質であります。」

しかし、これに続く修学年数に関する言及のあとの次の文章が注目されることは稀である。

「またその科目に至りては、一派における宗学と、及び他の諸宗の教義の学と、最も本学に直接の関係を有するところの須要なる世間の学科とを教授いたします。もちろん今日の有様では完全ではありませんけれども、冀わくば佛祖の冥祐の下に、外は広く内外諸士の賛助を得、内は教職員生徒一同に力を協せ、本学の目的を達したきことあります。」

つまり、今で言う「真宗学」「仏教学」に加えて「最も本学に直接の関係を有するところの須要なる世間の学」を教授するというのである。

この開校式に参列した人々は、本学が「その信仰を他に伝える、即ち自信教人信の誠を尽くす人物を養成する」「浄土真宗の学場」であるという、当時としては大胆な宣言に、驚きつつも賛同したであろう。しかし、その人々も、「最も本学に直接の関係を有するところの須要なる世間の学」という表現には首をひねったのではないか。いったいこの言葉で清澤満之は何を言おうとしているのか、と。この「世間の学」とは、英語やドイツ語の「外国語」と社会学などを含めた広い意味での「哲学」を指しているが、なぜそれらが「須要」と形容されるのか、と。

しかも、このカリキュラムは完全ではない、今後、さまざまな人々の協力の下、目的を達していきたい、とも述べられる。何を持って完全とするのか、どのような協力が必要なのか、という疑問も惹起される。

なんとも分かりにくい「開校の辞」である。

しかし、おそらく清澤は、わざとは言わないまでも、列席している人々が、そして後にこれを読む我々が、この文章をめぐって考え、そしてあれやこれやと議論するようにこの文章を起こしたのではないだろうか？

二七者の師は、我々に答えを与え我々から考える機会を奪うが、本当の師は、我々を謎の中に投げ込み考えさせる。

というわけで「須要なる世間の学科」から「浄土真宗の学場」を考えて、そのような議論に加わってみたい。

「浄土真宗の学場」などと言われると、「世間の学科」に携わる者は思わず後退りしてしまう。しかし、自分たちの立つこの現実世界を虚仮の世界として、そこから真実の世界つまり浄土を仰ぎ欲望することを学びとして位置づけたと考えればよいであろう。すると、浄土とは、お前ははまだ真実に欠けた者だということを示す光の満ちるところとなり、その光によって真実への欲望が喚起されるのである。

その欲望を喚起する光が、他力である。

「自己の信念の確立」とは、そのような他力によって真実への欲望を呼び覚まされた自分を引き受けるということであろう。したがって、その信念を他に伝えるつまり「自信教人信の誠を尽くす」ということは、きわめて難しいことである。

親鸞は、この「自信教人信」という言葉について、善導の『往生礼賛』の文章を次のように読み下している。

「自ら信じ人を教えて信じせしむ、難きが中にうたまたまた難し。大悲、弘く普く化する、真に仏恩を報ずるに成る。」(『教行信証』信巻)

自ら信じるところを人に教えることは、困難中の困難だと言う。なぜなら、大悲を弘めることは仏恩に報いるということによって成立する。つまりまず仏恩の承認が前提となる。したがって、人間一人の力では不可能な使命なのである。

つまり、ミッション：インポッシブルなのである。

したがって、我々教師ができることはただ一つ、真実の世界を激しく欲望する「愚者」として学生諸君の前に立ち、そのようにして真実の世界を仰ぎ見ることにより学生諸君の眼差しを真実の世界へと誘うことだけである。そして、その世界からの光によって学生諸君の中に真実への欲望が喚起される。

このような真実への欲望が燃え盛る場を「浄土真宗の学場」というのである。

したがって、真宗総合研究所は、教壇に立とうとするものが、何よりもその真実への欲望を確かめる場でなくてはならない。そこでは、「一派における宗学」はもちろん「世間の学科」も「浄土真宗の学場」に「須要なる」ものとして、総合されている。なぜならば、それらの世間の学問こそが、世間を照らす真実を激しく求めているからである。

2010(平成22)年度「指定研究」等 研究組織一覽

【特別指定研究】

研究名	研究課題及び研究組織	
大谷大学親鸞聖人 750回御遠忌記念 特別指定研究	研究課題	親鸞像の再構築
	研究代表者	延塚知道(教授・真宗学)
	研究員	一楽真(教授・真宗学)
		池上哲司(教授・倫理学)
		山野俊郎(教授・仏教学)
		渡辺啓真(教授・倫理学)
		東館紹見(准教授・日本仏教史学)
		山田恵文(講師・真宗学)
	嘱託研究員	平雅行(大阪大学教授)
		小山正文(同朋大学仏教文化研究所研究顧問)
		安富信哉(本学特別任用教授)
	研究補助員	大艸啓(博士後期課程第3学年)
		法水淳一(博士後期課程第1学年)

【指定研究】

研究名	研究課題及び研究組織	
国際仏教研究	研究課題	諸外国における仏教研究の動向の把握と資料の整理・収集・公開
	研究代表者	ロバートF.ローズ(キャップ・教授・仏教学)
	研究員	浅見直一郎(キャップ・教授・東洋史学)
		飯田剛史(教授・宗教社会学)
		加来雄之(教授・真宗学)
		桂華淳祥(教授・東洋史学)
		ディディエ・ヴェステル(教授・フランス語・フランス文化)
		番場寛(教授・フランス語・フランス文学)
		井上尚実(准教授・真宗学)
		藤枝真(准教授・哲学・宗教学)
		松浦典弘(准教授・東洋史学)
		村山保史(准教授・西洋哲学)
		廣川智貴(講師・ドイツ文学)
		箕浦暁雄(講師・仏教学)
	嘱託研究員	マイケル・バイ(マールブルク大学名誉教授)
		ポール・ワット(デポー大学教授)
		マークL.ブラム(ニューヨーク州立大学准教授)
		羽田信生(毎田周一センター所長)
		江田憲治(京都大学大学院教授)
		井黒忍(早稲田大学高等研究所助教)
	研究補助員	圓山亜美(博士後期課程満期退学)
		王奕明(博士後期課程第3学年)
		山高秀介(博士後期課程第3学年)
	斉藤覚(博士後期課程第2学年)	

研究名	研究課題及び研究組織	
西藏文献研究	研究課題 研究代表者 研究員 嘱託研究員 研究補助員	チベット語文献のデータベース化 兵藤一夫(教授・仏教学) 福田洋一(教授・仏教学) 小谷信千代(本学名誉教授・特別研究員) 白館戒雲(本学名誉教授・特別研究員) クンガ(青海民族大学蔵学院副教授) ダシュ ショバラニ(本学非常勤講師・特別研究員) 宮本浩尊(本学非常勤講師) 林哲照(博士後期課程満期退学) 渡邊温子(博士後期課程第2学年)
大谷大学DB研究	研究課題 研究代表者 研究員 嘱託研究員 研究補助員	大谷大学所蔵貴重資料のデジタル映像化 宮下晴輝(教授・仏教学) 柴田みゆき(准教授・人文情報学) 山本貴子(准教授・図書館情報学) 酒井恵光(講師・人文情報学) 清水洋平(本学非常勤講師) 岡本隆明(立命館大学PDフェロー) 松下俊英(博士後期課程満期退学) 稲葉維摩(博士後期課程第1学年)
真宗同朋会運動研究 (和田稠氏の寄付金による特別研究)	研究課題 研究代表者 研究員 研究補助員	真宗同朋会運動の歴史と現状を「聞き書き」を通して把握し、その現代的意義を明らかにする 水島見一(教授・真宗学) 佐賀枝夏文(教授・社会福祉学) 富岡量秀(講師・真宗学・幼児教育学) 佐々木秀英(博士後期課程第3学年) 安居宏淳(博士後期課程第2学年)

【大谷大学史資料室】

研究名	研究課題及び研究組織	
大谷大学史資料室	整理課題 室長 研究補助員	大学史関係資料の収集・整理 山本和彦(研究所主事・准教授・仏教学) 大畑博嗣(博士後期課程満期退学) 香月拓(博士後期課程第3学年)

【真宗本廟(東本願寺)造営史資料室】

研究名	研究課題及び研究組織	
真宗本廟(東本願寺) 造営史資料室	整理課題 室長(研究員) 研究員 研究補助員	真宗本廟(東本願寺)造営史関係資料の整理と出版 平野寿則(准教授・日本近世史・仏教史) 川端泰幸(任期制講師・日本中世史) 大谷めぐみ(博士後期課程満期退学) 吉田仁美(博士後期課程第2学年) 拝原祥子(博士後期課程第1学年)

2010(平成22)年度「指定研究」研究目的紹介

大谷大学親鸞聖人750回御遠忌記念 特別指定研究

親鸞像の再構築

研究代表者・教授 延塚 知道
(真宗学)

本研究班は、2011年の親鸞聖人750回御遠忌に向けて、過去50年間における親鸞研究の動向を整理・検証し、これからの親鸞研究に新たな展望を開くことを目的としている。これまでに、様々な専門分野の研究者を招いて公開研究会を開催し、その成果を公表してきた。そして、その成果を踏まえて、現在親鸞研究においてどのような課題があるかを検討してきた。その結果、『教行信証』に基づく親鸞像の再構築、歴史学の最新の成果を踏まえた親鸞像の再構築、そして現代の諸問題についての親鸞思想からの究明などの研究課題が明確になった。よって、以上の課題に沿った論集『親鸞像の再構築—親鸞を訪らう—』を作成し刊行することを現在目指している。真宗学、仏教学、歴史学、哲学、社会学、文学など各専門分野の研究者の協力を仰いで、2011年の御遠忌に合わせて出版し、未来の親鸞研究に新たな展望を開くことに寄与したい。

また、前回御遠忌以降の50年間にわたる親鸞研究を概観するのに資するデータベース並びに文献目録の作成を目指す。

1. 御遠忌記念論集の編集作業

今年度は、2011年度中での論集刊行を目指し、編集作業に全力を傾けていく。執筆者及び研究員による校正を複数回行い、引用文の扱い、表記の統一など論集全体のバランスを睨みながら、内容の整合性を図っていく。また論文執筆者を招き、執筆論文の内容報告を行っていただく研究会を随時開催する予定である。研究会において、論集編集の進捗状況を報告するとともに、現在の親鸞研究の課題を執筆者と共有していくこととしたい。

2. 文献目録の作成

2010年度中に『仏教書絵目録』からのデータ入力作業

を完了する。また、学術雑誌所収論文についてはデータの充実を図ると共に、中断中である全集・叢書分野においては入力作業を再開する。以上の計画に沿って作業を遂行し、全体の進行状況によっては、2006年度中に策定した作成方針の修正を行うことも視野に入れながら、〈データベース〉の構築と〈文献目録〉の作成・出版を目指したい。

国際仏教研究

諸外国における仏教研究の 動向の把握と資料の整理・ 収集・公開

研究代表者・教授 ロバート F. ローズ
(仏教学)

本研究は、諸外国における仏教を中心とした宗教研究の動向を把握するとともに、国際社会に対して本学の真宗・仏教研究を公開することを目的としている。その目的を遂行するために、これまで受信と発信の両面から以下のような活動を行ってきた。本年もこれらを発展的に継続する。

〈受信〉①海外における仏教関係書誌の収集・整理とデータベースの構築。②仏教を中心とした宗教研究者を招聘しての講演会・研究会の開催。③海外における宗教及び関連文化の諸相の調査。

〈発信〉①真宗・仏教関係文献の翻訳と出版。②仏教・宗教関係国際学会に研究員が参加して論文発表。仏教・宗教関係国際学会を企画・開催。

従来は英語圏を中心として研究活動を行ってきたが、近年はヨーロッパや中国など、他の言語文化圏へも活動の範囲を拡大している。本年も〈英語班〉〈ドイツ・フランス班〉〈中国班〉がそれぞれの言語文化圏を担当し、以下のような具体的研究テーマ・目的にそって研究を進める。

—英語班—

〈研究テーマ〉

- ①英語圏における仏教研究動向の把握
- ②真宗・仏教関連資料の英訳出版

〈研究・活動内容〉

- ①真宗・仏教関係の国際学会の年次大会参加
国際真宗学会欧州地区大会(8.24~27クライオヴァ、ルーマニア)、アメリカ宗教学会(10.31~アトランタ)、アジア学会(3月ハワイ)などに研究員を派遣し、情報収集・研究交流を行う。
- ②真宗近代教学アンソロジーの英訳 *An Anthology of Modern Shin Buddhist Writings* について、7月を目処に最終的な出版契約をニューヨーク州立大学出版(SUNY)と交わし、年度内に発行する。
- ③佐々木月樵「大谷大学樹立の精神」翻訳研究
2009年度から始まった翻訳プロジェクト、佐々木月樵の「大谷大学樹立の精神」の英訳出版について、月一回程度の研究会を開催し継続する。
- ④公開講演会の開催
学術交流の促進を図るため、国内国外で活躍している真宗学・仏教学関係の学者を招聘し、公開講演会を4回程度開催する。
- ⑤仏教関係の洋書・学会誌のデータベース公開
英語班が収集してきた英文資料の整理を行い、図書館と協力して利用し易い形に改め、データベースを公開できるようにする。
- ⑥国際研の英語班ホームページを立ち上げ、公開講演会・海外学会参加報告等の情報を公開していく。

—ドイツ・フランス班—

〈研究テーマ〉

仏教・他宗教比較研究

- ①「プロテスタント神学との対話」
②「日本における近代化された宗教に関する宗教史的・社会学的観点からの研究」

〈研究の目的〉

- ①「プロテスタント神学との対話」
浄土真宗とプロテスタント神学との対話・比較研究を継続していく。具体的な研究として、マルブルク大学神学部ディートリヒ・コルシュ教授の『マルティン・ルター』(原題: *Martin Luther: Eine Einführung*) の翻訳作業が現在進められている。2010年度中の出版を計画している。原著の参考文献表に加え、日本語で入手できるルター関連の文献を網羅した一覧も付録する予定である。
- ②「日本における近代化された宗教に関する宗教史的・社会学的観点からの研究」
フランス国立高等研究院(EPHE)の宗教社会学部門との交流を継続していく。2010年5月5,6日に、「National Identities and Religion: A French-Japanese

Comparative Approach」という全体テーマのもとでシンポジウムを開催する(於パリ EPHE)。ドイツ・フランス班からは以下の6人の研究員が発表する。

(アルファベット順)

Hiroshi BAMBA

“Essai sur le discours religieux dans le Japon contemporain—Autour des noms et du nembutsu—”

Shin FUJIEDA

“Indoctrinating the Younger Generation: A Strategy of Yasukuni Shrine for the Propagation of Patriotism.”

Takafumi IIDA

“Nationalism of Japanese Today: co-existence and exclusion”

Takami INOUE

“Transformation of Japanese Buddhism during the 19 century: Focusing on the Impact of the Meiji Restoration and the Persecution of Buddhism.”

Yasushi MURAYAMA

“State and Religion in the Thought of Daisetsu Suzuki”

Robert F. RHODES

“The Buddhist-State Relationship in Japan: Some Observations on the Thought of Saicho and Kukai, Two Early Medieval Monks of the Ninth Century”

—中国班—

〈研究テーマ〉

中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教と文化の研究
〈研究目的〉

中国華北地域、東北地域(いわゆる満洲)、東部モンゴル地域(内モンゴル自治区東部)における宗教及び関連文化の諸相を、歴史史料によって再構成し、さらに現地調査によって明らかにしていく。

〈研究方法〉

本学図書館に所蔵される真宗大谷派海外布教関係資料のうち、中国華北・東北地域に関する部分について調査し、中国の在地仏教に対する日本仏教の働きかけの形跡を追究することによって、当該地域、ひいては東アジア全体の宗教活動の様相の把握を目指す。また、本学と中国・東北師範大学(吉林省長春市)との学術提携ならびに中国社会科学院歴史研究所(北京市)との学術協定に基づき、双方の研究員が往来して本テーマに関わる共同研究会を実施する。さらに現地関係者の協力を得て当該地域に存する仏教遺跡あるいは近時急速に復興しつつある仏教寺院など宗教施設の探訪調査を行う。

〈研究計画〉

- ① 本学図書館所蔵・真宗大谷派海外布教関係資料の調査
華北地域資料（仮番号16～25）及び華中地域資料（仮番号26～）について、一覧作成作業及びデータベースへの入力作業を実施する。
- ② 共同研究「中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教と文化」の推進
 - 1) 前記研究機関より本年7月及び12月にそれぞれ2名の研究者を一週間程度本学に招聘し、共同研究ならびに公開研究会を開催する。
 - 2) 江田憲治（京都大学教授）嘱託研究員、井黒忍（早稲田大学高等研究所助教）嘱託研究員より専門的知識の提供を受けつつ、東部モンゴル地域及び華北・東北地域における仏教文化の諸相について、現地調査を行う。
 - 3) 研究テーマに関連する国内専門研究者を招聘し、公開講演会・公開研究会を開催する。

西藏文献研究

チベット語文献のデータベース化

研究代表者・教授 兵藤 一夫
(仏教学)

北京版チベット大蔵経をはじめとする本学所蔵チベット語文献は、国内有数のコレクションを誇っており、本学はもとより国内外のチベット研究を大きく支えている。本研究は、チベット研究推進の基盤を整備するため、このコレクションを専門の研究者が十分に活用できるようにすることを目的とする。本年度は近年収集された文献について、その整理を通じて全体像の把握と提示をおこなう。また、重要ないし貴重と思われる文献については電子テキスト化をおこなう。

上記の目的を達成するため、今年度は、以下の研究をおこなう。

- (1) 大谷大学図書館所蔵チベット語文献のデータベース化、電子テキスト化
本学所蔵の稀覯本、ツァンナクバ著『量決訳註』の電子テキスト化とその公開をおこなう。電子テキスト化に際しては、これまでどおり、本研究班が開発してきた Otani Unicode Tibetan Language Kit を用い

る。

- (2) 大谷大学図書館所蔵チベット語文献の整理
図書館から提供されたチベット語文献の書誌データに対する整理・分析をおこない、全体像を把握するとともに、それらのデータを利用（とりわけ検索）する研究者の立場からそこに問題点がないかどうかを確認する。この研究には、図書館との連携が必要である。
- (3) 海外の研究者との交流
ブリティッシュ・コロンビア大学（バンクーバー）で8月15日～21日に開催される第12回国際チベット学会に参加し、研究発表をおこなうとともに、学術上の情報交換をおこなう。
また、これまで電子テキスト化をおこなってきたミラレーパ伝の研究のために、当該伝記に対する研究を進めている青海民族大学蔵学院のクンガ（更尕）氏を招聘し、共同で研究をおこなう。
- (4) その他

適宜、内外のチベット文献学関係の研究者を招き研究会を開催する。オリッサ州 SARASVATI 研究所所蔵貝葉文献の研究をおこなう。

大谷大学DB研究

大谷大学所蔵貴重資料のデジタル映像化

研究代表者・教授 宮下 晴輝
(仏教学)

【研究意義・目的】

大谷大学所蔵の貴重な学術資産ならびに真宗関係文化財のデータベース化とその公開に対する大学内外からの要望は高く、これに応えることは研究・教育機関としての重大な責務である。これまでのデジタル・データ化は個々の研究班・研究員や部署等による個別具体的なものが多く、大学として体系的な提示手法が問われている。先学の価値をさらに高め、より大きな体系として内外に提示するために、全学的な視野に立つデータベースの設計・構築・運用が必須となる。さらに、2011年の親鸞聖人750回御遠忌までに公開が実現できるならば、本学の取り組みとしての意義は大きい。

本研究班は上述の意義を実現するために、人文科学

領域及び情報科学領域の両面において、基礎的な研究を重ねてきた。この過程で、研究開始当初の研究課題に一定の考察結果を得るとともに、新たな問題も浮上した。これらの諸問題の検討にあたり、関係各部署から多大の協力を仰ぐなかで、本研究班の意義と目的が共通認識として浸透しつつある。

2010年度は、この2年間の成果をふまえ、以下の2点を重点目標とする。

1. デジタル・データ化の加速と公開の準備
2. 蓄積した研究成果の公表

【研究計画・方法】

本研究班の研究意義を考えると、学内の諸機関（とくに教育研究支援課・情報コア・図書館・博物館）、及び真宗総合研究所の各研究班との一層の協力が必須である。その前提にたち、2010年度の重点目標とした2点につき、以下の計画を立案した。

まず、デジタル・データ化の一層の推進に対しては、以下の4項目を計画する。

1. 本学所蔵の北京版チベット大蔵経のデジタル・データ化をさらに推進する。過去に撮影されたマイクロフィルムのデジタル・データ化と、一次史料の写真撮影とを並行して行う。マイクロフィルムのデジタル・データ化作業は、2009年度までに50巻分が完成した。残り80巻余に対する作業を急ぐ。一次史料のデジタル写真撮影は、2009年度に購入した機材を用い、2010年度に採択された科学研究費対象の個所から優先的に作業を行う。
2. パーリ語貝葉写本のデジタル・データ化のための作業を続ける。この作業は、公開の必要性の高い個所を確認する作業が必須であるため、内外の研究者との意見交換や調査活動も行う。
3. 真宗関係文化財（音声テープ・写真等）の収集とデジタル・データ化の作業を行う。貴重史料は、状況調査に基づきデジタル・データ化の一過程として劣化部分の適切な電子的復元作業も行う。また、一次史料の保存手法も考察する。
4. その他の大学所蔵データのデジタル化、及び既デジタル化資産の移管と公開の検討を行う。特に、本学博物館所蔵の古地図データ・本学学術刊行物・本学図書館所蔵の古典籍に対するデジタル・データ化の検討が要請されている。

次に、蓄積した研究成果の公表として、以下の2項目を計画する。

1. 関連領域における学会報告、及び、学内の公開研究成果発表会の開催によって、成果を内外に公開す

る。

2. 学内ネットワークを利用したデータ公開実験のために、デジタル・データの提示手法の考察を行い、並行して公開システムを構築する。

真宗同朋会運動研究

真宗同朋会運動の歴史と現状を「聞き書き」を通して把握し、その現代的意義を明らかにする

研究代表者・教授 水島 見一
(真宗学)

本研究は、真宗と社会との関わりを主題とし、具体的には真宗同朋会運動における求道と獲信に学ぶものである。同朋会運動は、本来、地域に根ざした草の根運動である。したがって、本研究は、一人ひとりにおける「群萌の目覚め」に視点を置き、特に、求道の道程に焦点をあてて、一人ひとりの宗教的人格に触れることを通して、真宗同朋会運動の意義を明らかにすることを目的とする。

また、信仰が生み出す社会性、および人々の精神性に与えた影響なども調査を通して把握し、真宗同朋会運動の現状や社会的・現代的意義を明らかにしていきたい。

以上のことから、本研究は全体を理論編と調査編の二部構成として組み立てていく。

- ①理論編：本研究の導入研究であり、同朋会の歴史と社会的背景、同朋会運動への教団の施策、同朋会運動の中心人物に関する資料を収集し、整理していく。2009年度は基本資料の整理と分析、また学外研究者による公開研究会を行い、多角的な同朋会運動への確かめを行った。2010年度も引き続き理論編の構築を進める。
- ②調査編：本研究の中心であり、門信徒の方々に「聞き書き」という調査手法を用いた調査を展開する。そのことを通して、宗教的人格を具体的に明らかにしていく。2009年度にも実施したが、2010年度も引き続き調査を行う。

上記の研究目的を遂行するために、本年度も引き続き理論編と調査編において、以下のような活動を進め

ていく。

理論編：○年表の作成

- 1) 真宗大谷派の視点から：宗報『真宗』の関係記事を精査し、整理していく。
- 2) 通仏教の視点から：『文化時報』、『中外日報』の関係記事を精査し、整理していく。

○同朋会運動と宗門内組織との関係構造の把握

- 1) 真宗大谷派宗務所へヒアリング調査
- 2) 宗報『真宗』の関係記事の精査

○同朋会運動の運動史の整理

- 1) エピソード抽出（人物中心）
- 2) エピソード抽出（事象中心）

調査編：2010年度は、2009年度の研究成果のテープ起こしを元にして、

○聞き取りをした方々のエピソードを分析し、同朋会運動の展開における位置づけを把握する。

○学外研究者の視点の整理と、それによる同朋会運動の点検。

○「聞き書き」調査の分析。

以上のことから、さまざまな形で、学外講師を招き、御指導いただき、調査内容を深めていかなければならない。また本研究は真宗大谷派宗門との深い連携関係の構築が必須となる。そのため宗門の教学研究所との協同し、研究を展開していく。

2010(平成22)年度「一般研究」研究組織一覽

【共同研究】

研究名等	研究課題及び研究組織
【2010年度科研採択】 一般研究(渡部班)	<p>研究課題 元朝期～明朝初期の言語接触に関する文献学的研究</p> <p>研究代表者 渡部 洋(准教授・中国語・近世中国語文法)</p> <p>研究員 松川 節(教授・東洋史学・人文情報学)</p> <p>協同研究員 小野 浩(京都橘大学教授)</p> <p>古松 崇志(京都大学人文科学研究所助教)</p> <p>石野 一晴(千里金蘭大学非常勤講師)</p> <p>毛利 英介(神戸女子大学非常勤講師)</p> <p>研究協力員 伴 真一朗(博士後期課程満期退学)</p>
【2010年度科研採択】 一般研究(池上班)	<p>研究課題 日本における西洋哲学の初期受容 —清沢満之の東京大学時代未公開ノートの調査・分析—</p> <p>研究代表者 池上 哲司(教授・倫理学)</p> <p>研究員 加来 雄之(教授・真宗学)</p> <p>門脇 健(教授・宗教学)</p> <p>朴 一 功(教授・西洋古代哲学)</p> <p>村山 保史(准教授・西洋哲学)</p> <p>協同研究員 藤田 正勝(京都大学大学院教授)</p> <p>竹花 洋佑(本学任期制助教)</p> <p>西尾 浩二(本学非常勤講師)</p> <p>研究協力員 竹中 正太郎(博士後期課程満期退学)</p>
【予備研究】 一般研究(川村班)	<p>研究課題 仏教と教育の関係性に関する批判的基礎的研究 —「慈育」構築の根拠を求めて—</p> <p>研究代表者 川村 覚 昭(教授・教育哲学・教育人間学・仏教教育学)</p> <p>研究員 関口 敏 美(教授・教育学・日本教育学)</p> <p>高山 芳 治(教授・社会科教育学)</p> <p>山内 清 郎(准教授・教育人間学・臨床教育学)</p> <p>協同研究員 木越 康(准教授・真宗学)</p> <p>田中 久美子(准教授・社会心理学・教育心理学)</p> <p>大野 僚(本学非常勤講師)</p>
【予備研究】 一般研究(佐賀枝班)	<p>研究課題 浄土真宗における社会实践展開の再構築 —保育・教育・福祉への視座—</p> <p>研究代表者 佐賀枝 夏文(教授・社会福祉学)</p> <p>研究員 水島 見 一(教授・真宗学)</p> <p>富岡 量 秀(講師・真宗学・幼児教育学)</p> <p>協同研究員 真城 義 麿(大谷中・高等学校長)</p> <p>脇淵 徹 映(大谷保育協会理事長)</p>
【予備研究】 一般研究(柴田班)	<p>研究課題 線分交叉を伴う系図表示の基礎的研究</p> <p>研究代表者 柴田 みゆき(准教授・情報処理学)</p> <p>研究員 宮下 晴 輝(教授・仏教学)</p> <p>協同研究員 松浦 亨(北海道大学附属大学病院企画マネジメント部准教授)</p> <p>杉山 正 治(立命館大学情報理工学部助教)</p> <p>生田 敦 司(本学非常勤講師)</p> <p>山口 直 文(ヒロセ(株)東京本店総務管理部管理チーム)</p>

研究名等	研究課題及び研究組織
【予備研究】 一般研究（山本班）	研究課題 オリヤー文字サンسكريット貝葉写本調査 研究代表者 山本和彦（准教授・仏教学） 研究員 兵藤一夫（教授・仏教学） 協同研究員 ダシュ ショバラニ（本学非常勤講師・特別研究員） 研究協力員 パリマル・パティル（ハーヴァード大学准教授） アニルバン・ダシュ（サールナート・チベット学中央大学講師）
【2007～2010年度科研採択】 一般研究（小谷班）	研究課題 ポタラ宮所蔵ステイラマティの俱舎論注釈書『真実義』の新出梵文写本研究 研究代表者 小谷信千代（本学名誉教授・特別研究員） 研究員 箕浦暁雄（講師・仏教学） 協同研究員 松田和信（佛教大学教授） 福田琢（同朋大学教授） 本庄良文（佛教大学特別任用教授） 秋本勝（京都女子大学教授）
【2008～2010年度科研採択】 一般研究（桂華班）	研究課題 石刻史料からみた宋元時代華北地方における仏教の社会史の変遷に関する基礎研究 研究代表者 桂華淳祥（教授・東洋史学） 研究員 浅見直一郎（教授・東洋史学） 協同研究員 藤原崇人（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員） 井黒忍（早稲田大学高等研究所助教） 福島重（本学任期制助教）
【2009～2011年度科研採択】 一般研究（松川班）	研究課題 世界遺産エルデニゾー僧院に関する総合的研究—過去の復元から未来への保存へ— 研究代表者 松川節（教授・東洋史学・人文情報学） 研究員 三宅伸一郎（講師・チベット学）

【個人研究】

研究名等	研究課題及び研究組織
【2010年度科研採択】 一般研究（阿部班）	研究課題 変動期の社会における法秩序の再構築—南アフリカとカンボジアの比較社会学的研究 研究代表者 阿部利洋（准教授・社会学）
【2010年度科研採択】 一般研究（飯田班）	研究課題 民族文化祭の比較研究 研究代表者 飯田剛史（教授・社会学）
【2010年度科研採択】 一般研究（古川班）	研究課題 世界史における東アジアとアフリカ—国際共同研究のための基盤形成— 研究代表者 古川哲史（准教授・歴史学／比較文化・社会論）
【予備研究】 一般研究（鈴木班）	研究課題 京都北山の地形・地質形成と文化 研究代表者 鈴木寿志（講師・地質学・古生物学）
【予備研究】 一般研究（田中班）	研究課題 ダイエット行動の「三日坊主」に対する予防・教育的プログラムの実践的研究 研究代表者 田中久美子（准教授・社会心理学・教育心理学）
【2008～2010年度科研採択】 一般研究（ショバ班）	研究課題 日本で発見されたオリヤー語『マハーバーラタ』の研究 研究代表者 ダシュ ショバラニ（本学非常勤講師・特別研究員）
【2009～2011年度科研採択】 一般研究（白館班）	研究課題 チベット仏教における論理学の研究 研究代表者 白館戒雲（本学名誉教授・特別研究員）
【2009～2011年度科研採択】 一般研究（脇中班）	研究課題 高次脳機能障害者とその家族のピアサポートによる自己と関係の変容に関する発達の研究 研究代表者 脇中洋（教授・発達心理学・法心理学）
【2010年度科研採択】 一般研究（林班）	研究課題 ルネサンス詩におけるアレゴリーの変容—ロンサルからキリアンへ— 研究代表者 林千宏（本学任期制助教・特別研究員）
【2010～2011年度科研採択】 一般研究（朴班）	研究課題 フレデリック・ダグラス晩年のマスキュリニティ言説とアメリカ社会における人種表象 研究代表者 朴珣英（本学任期制助教・特別研究員）

2010(平成22)年度「一般研究」研究目的紹介

共同研究

浄土真宗における社会実践展開 の再構築

—保育・教育・福祉への視座—

研究代表者・教授 佐賀枝 夏文
(社会福祉学)

【本研究の目的】

本研究は、真宗教学に立脚した、保育・教育・福祉の3領域の社会実践の歴史的背景と現状への調査を行う。そのことを通して、教学から社会実践の展開における、理念の確認と課題を抽出し、改めて3領域の実践現場に真宗の社会実践のあり方を提言することを目的とする。

真宗教学は、非常に厳密かつ厚重的な教学研究の歴史をもっている。そして近代以降、真宗教学を基盤として真宗大谷派は、保育・教育・福祉の3領域において、具体的な社会実践を展開し続けてきた。その中には、先駆的な事業展開もあり、その実践の基盤となっているものも多い。しかし現在、実践現場では、実践理念としての真宗教学との関係性が不明であり、その実践の根拠が曖昧なものとなっている。このことから本研究は、実践現場と連携した実際的な研究を展開していく。

【本研究の展開】

そこで本研究は、保育・教育・福祉の実践現場との研究連携体制の構築をしていく。この3領域の中で教育事業は、大谷大学を中心に展開され、現在、大学8校、短期大学9校、高等学校19校、中学校5校、小学校1校、幼稚園1園の真宗大谷派学校連合を構成している。また保育事業は、現在、社団法人大谷保育協会があり、加盟園は幼稚園・保育園合わせて、現在約550園を抱え、実践を展開している。また、福祉事業は、教諭師に端を発して多岐にわたる実践を展開している。

このことから本研究は、3領域の実践現場との連携体制の構築から、真宗教学と社会実践の展開が、如何に切り結び、今後更に如何に社会貢献していくことができるかを、明らかにしていく。

2009年度は、研究連携体制の構築づくりを行った。真

宗大谷派関係学校の現場の教員との協議を行い、研究展開の基本テキストの選定と公開研究会などを行った。また社団法人大谷保育協会とは、緊密な連携体制を構築することができ、基本的な研究展開の方向性を明確化してきた。

そこで本年度は、昨年度に引き続き、実践現場と連携し基礎研究を展開したい。具体的には、真宗大谷派宗門、関連研究機関および実践現場での実際的な調査、すなわち、保育・教育・福祉の3領域の実践現場との連携した、調査（フィールドワーク等）を通じて、それぞれの実践における真宗教学の基盤と実践展開における現代的な課題を把握する。そのことを通して、真宗教学と社会実践における歴史的足跡を明らかにし、その事跡から実証的に分析と考察を重ねる。

共同研究

元朝期～明朝初期の言語接触 に関する文献学的研究

研究代表者・准教授 渡部 洋
(中国語・近世中国語文法)

13世紀に登場した元王朝は東アジアにおいて多種多様な民族の接触を活発にさせ一種独特な「多言語環境」を持つ社会を形成させた。この王朝の支配は100年ほどに過ぎず長くはないが、それ以前の遼、金等から続いた北方民族の支配は中国北方に住む漢族の言語に大きな影響を与えた。そのため当時の中国北方を中心に1つの共通語として「漢児言語」が形成され、同時に『元典章』、『孝経直解』、最近発見された『至正條格』等に見られる「白話風漢文体」或いは「蒙文直訳体漢文」と呼ばれる独特な口語体漢文も出現した。当然のことながら「多言語環境」下においてはこうした漢語の変化が支配層の言語であるモンゴル語に対しても一定の影響を与えたであろうことは想像に難くない。しかし、こうした漢語とモンゴル語双方の言語的な影響や変化がどのようなものであったかという多言語接触の状況については未だ明らかにはされていない。そこで本研究の目的はモンゴル語と漢語のバイリンガル資料（蒙漢合璧）を始めとする多言語資料を文献学的に研究し、当

時の「多言語環境」下での言語状況を解明するための基礎資料を作成することにある。

本研究は昨年度からの継続研究であるが、昨年度は中国語、モンゴル語、ペルシャ語を専門的に研究する者が中心となり、更にチベット語、トルコ語資料の扱いに通暁した研究者との協働により、下記碑刻文の解説を進め言語及び歴史両面からの分析を行った。更に直接現地に赴き不鮮明な文字や史実を確認するための調査も実施した。

- 1 「張氏先塋碑」(1335年：中国、内モンゴル自治区赤峰市翁牛特旗)
- 2 「達魯花赤竹公神道碑銘」(1338年：中国、内モンゴル自治区赤峰市翁牛特旗、現在所在不明)
- 3 「居庸關過街六体合璧造塔功德記」(1345年：中国北京市、現存)
- 4 「勅賜興元閣碑」(1346年：モンゴル国、ウランバートル市のモンゴル科学アカデミー考古学研究所及びハラホリン市エルゾニー寺院に一部現存)
- 5 「西寧王忻都公神道碑」(1362年：中国、甘肅省武威市永昌鎮、現存)

昨年度は、以上5件の漢語・モンゴル語のバイリンガル資料の分析を通して当時の漢語とモンゴル語相互の言語面での影響がどのようなものであったかを解明する手がかりを得ると同時に現地調査により不鮮明な文字及び史実の確認も行うことができた。

今年度は本研究班に所属する漢語、モンゴル語、チベット語、ペルシャ語等各言語の研究者の専門を生かせる資料をより多く取り扱い研究を継続するつもりである。予定としては下記の7件のバイリンガル資料を考えている。

- 1 『華夷譯語』(甲種本)
- 2 漢文・モンゴル文合璧『孝經』
- 3 五言語合璧『如來大寶法王建普渡大齋長卷画』
- 4 青海省瞿曇寺に現存する『御製金仏像碑』を始めとする漢文・チベット文壁碑文
- 5 福建省泉州に現存する『永樂帝諭旨』(漢文・モンゴル文・ペルシャ文合璧)
- 6 イスタンブールのトプカプ宮殿博物館の所蔵されている『景帝勅諭』(漢文・モンゴル文合璧)
- 7 四言語合璧『諸佛菩薩妙相名號經咒』

上記7件のバイリンガル資料の解説を進め、異なる言語双方の比較対照を通して相違する表現を抽出し、研

究者がそれぞれの視点からその原因や背景について探る。また、この作業過程を通して各資料からわかる未発見の史実や資料特有の語彙や修辭法についても解明する。

共同研究

日本における西洋哲学の初期受容 —清沢満之の東京大学時代未公開 ノートの調査・分析—

研究代表者・教授 池上 哲司
(倫理学)

1878年に東京大学は最初の外国人哲学教師としてフェノロサ(Ernest Francisco Fenolosa, 1853-1908)を招聘している。東京大学におけるフェノロサの担当科目は哲学、政治学、理財学(経済学)であった。彼が講義を通じて多くの思想家たちに影響を与えたことは聴講者の回想として伝えられているが、信頼に値するフェノロサの哲学関係の講義記録はこれまで未公開であった。

本研究の目的は、西方寺(愛知県碧南市)で発見された清沢満之(1863-1903)の遺稿(現在は、カラーフィルム化ないし文字データ化された「西方寺所蔵史料」として大谷大学が所蔵)中に発見された東京大学(大学院)在学時の哲学関係講義録の全体を翻刻してフェノロサを中心とする東京大学の外国人哲学教授たちの講義内容を公開することであり、この作業を通じて日本における最初期の哲学思想受容過程の一側面を解明することである。こうしたわれわれの調査・分析作業は、(1)第一次作業(調査編集作業)および第二次作業(思想分析作業)に分けられるが、2010年度の本研究では、第一次作業(調査編集作業)を重点課題とし、実施する。

第一次作業を具体的に言うなら、(a)講義録の講義がいつの、どの外国人哲学教師によるものなのかを周辺資料(東京大学等が所蔵する授業関係資料、清沢自身の文献、当時東京大学に在学していた清沢以外の者が講義に言及している文献等)を調査して明確にしつつ、(b)講義録を編集する作業である。より詳細には、(a)の調査作業では、明治期外国人哲学教師の授業全体におけるそれぞれの講義の位置づけを明らかにするために、清沢が受講した外国人教師のみならず、1878年から1886

年まで在職したフェノロサにはじまり1893年から1914年まで在職したケーベル (Raphael von Koeber, 1848-1923) にいたる、明治期の東京大学における外国人哲学教師たちの在職期間、担当授業などの詳細をとりまとめた資料(「東京大学外国人哲学教師資料」仮称)化する。(a)(b)の成果は、まずホームページや公開講演会において公開し、次いで学術論文において公開する。

共同研究

仏教と教育の関係性に関する 批判的基礎的研究

——「慈育」構築の根拠を求めて——

研究代表者・教授 川村 寛昭
(教育哲学・教育人間学・仏教教育学)

ここ10年余り教育関係者や宗教関係者の中で「心の教育」や「生きる力」が、教育の危機的事態に対処する切り札であるかのように繰り返し語られてきた。我が国の近代公教育制度における学校教育と宗教の関係は、信教の自由の理念に基づいて機能的な分離を原則とし、この理念に従って宗教への寛容の態度の育成と私学における宗教教育の自由を認めてきたが、最近では上記の心の教育や生きる力に便乗し、学校教育と宗教の性急で無原則な関係づけを主張する議論が見られるようになった。

本研究は、心の教育や生きる力という正体不明な教育論・教育観に安易に与することなく、むしろ、それらを重要な教育学的な分析対象と見立てた上で、教育現実に革新的な意味を湧出させる実践的な仏教的教育(それを《慈育》と呼ぶ)の複眼的な探求を目指すものである。

それ故、本研究では、「心の教育」「生きる力」などのスローガンの口当たりのよさに隠蔽されがちな《慈育》の所在と深相(層)を解明するとともに、《慈育》の具体相(層)をイメージ化できる地点に到達したいと思う。その上で、《慈育》が心の教育・生きる力の隠蔽性に十分拮抗しうるかを精査したいと考えている。しかし、そのためには、本領域における従来の研究スタイルを批判的に刷新する研究方法の構築が不可避の課題である。

従来の《仏教》的教育論は、教育学との批判的応答

の場を十分に経過せずに、自己完結的に立論される傾向が強いが、それは仏教の神話的な根源言説において教育の現象と歴史を語る研究であって、教育独自の論理や意味は仏教の教説の文脈に回収され、その固有性は存在論的に忘却・解消されていると言えるであろう。

それ故、本研究では、①仏教教育における仏教言説と教育言説に関する批判的多面的な研究、②仏教と教育の関係性の現状に関するフィールド調査と仏教教育言説の分析、③現代教育への提言と具体的な教育実践における仏教的教育の構想の実験的プログラムの作成により、従来の《仏教》的教育論において隠蔽されていた《教育》の論理や意味に関する局面を拓くことになる。

以上の3つの研究課題および方法によって我々は、仏教と教育の関係性の所在と形態を複眼的に探求し、《仏教教育言説》が単に学校教育における問題行動予防や社会的適応の支援という心理学的・対症療法的文脈に留まるものではなく、それを突き抜けた《心》や《生きる力》の次元の教育にも開かれている存在様態であることを解明したいと考えている。

共同研究

線分交叉を伴う系図表示の 基礎的研究

研究代表者・准教授 柴田 みゆき
(情報処理学)

当研究班は、コンピュータ上でユーザーが自由に入力・編集・提示が可能で、かつ紙媒体で行われてきたインターフェイスに類似した系図表示ソフトウェアの完成を目標として、平成18年から研究活動を行ってきた。

これまでの成果として、系図表示ソフトウェアのプロトタイプシステム MaSSRiDGe (Magnifying And Simplifying System for Retrieve and Display GENEalogy)を開発した。また、人文研究において多用される、線分交叉を伴った系図表現を行うためのデータベース設計コンセプト WHItEBasE (Widespread Hands to InTErconnect BASic Elements)を構想し学会で発表を行った。

科学研究費申請および真宗総合研究所の一般研究申

請にあたり、具体的な3年後の目標として、現在計画中のWHiteBasEとMaSSRIDGeとを融合する新しいコンセプト構築を設定した。

平成22年度は、上述の目標設定に対して以下の3点の実現を計画する。

- (1)MaSSRIDGeの動作確認対象は、OSではMacOS、Windows(XP以前)、閲覧のためのWebブラウザとしてはInternet Explorer、Firefox、Safariに限られた。現在、有償/無償のものをあわせると、OS、Webブラウザともに相当数の種類とバージョンを数える。また、ソフトウェア開発環境もWindows中心であり、MacOSに向けた環境が万全ではなかった。そこで、これまでの研究活動で不足した開発研究をMacOSを中心に補足し、開発ソフトウェアの動作確認を行う。併せて、WHiteBasEのプロトタイプを実装し、同様に動作確認を行う。
- (2)MaSSRIDGe、およびWHiteBasEの有効性を検証するには、検討に十分な量のデータ入力が必要となる。また、柔軟な表示機能を実現させれば、系図以外の分野(例えば、化学解析分野等)での系統図にも応用可能である。そこで、MaSSRIDGeおよびWHiteBasEに投入すべきデータについて調査し、系図・系統図表示のあり方を検討する。
- (3)上述のように新しいデータベース設計のコンセプトを学界に提示した。このシステムが大規模データベースとして動作可能かについて、調査検討する。

共同研究

オリヤー文字 サンスクリット貝葉写本調査

研究代表者・准教授 山本 和彦
(仏教学)

研究目的

本研究は、未調査のデリー・インド国立写本館、ドイツ・ハイデルベルク大学所蔵写本の調査と米国ハーヴァード大学での写本テキスト校訂作業などを行う。

研究計画・方法

これまでショバ・ラニ・ダシュ協同研究員がオリッサ州各地において現地調査と資料収集を行ってきた。山

本和彦研究員も2009年3月にオリッサ州立博物館、サラスヴァティ研究所、ラグナンダン図書館において現地調査を行った。2010年1月から3月までショバ・ラニ・ダシュ協同研究員が、ドイツ・ハイデルベルク大学に客員教授としてアレックス・ミッシェル教授より招聘された。この機会に同大学が1970-75年に調査・収集したオリヤー文字(コロニー書体)サンスクリット貝葉写本のマイクロフィルムの量と内容が把握できた。その情報をもとに、2010年4月以降に同大学所蔵資料の収集(デジタル化と保存)を行う。

デリーのインド国立写本館は未調査であるので、同館所蔵写本のマイクロフィルムの量と内容をまず調査する。さらに本研究と関係のある資料をマイクロフィルムからデジタル化し保存・整理・データベース化を行う。同写本館のメンバーであるア Nilpan・ダシュ講師(研究協力員)の協力を得て調査・研究を行う。

米国ハーヴァード大学ではヒンドゥー教の祭祀を内容とするテキスト『プラーヤシュチッタ・カラナ』と『プラーヤシュチッタ・マノーハラ』を校訂する。これらのテキストはダルマ・シャストラ(法典)の一部を構成すると思われるが、詳細については同大学インド・サンスクリット学科のパリマル・パティル准教授(研究協力員)の協力を得て研究を行う。

個人研究

変動期の社会における法秩序の再構築 ——南アフリカとカンボジアの 比較社会学的研究

研究代表者・准教授 阿部 利洋
(社会学)

紛争後の変動期にある社会は、紛争再発を防ぎつつ、社会を再統合しようと試みる——法秩序を回復する、相互不信・憎悪の集合感情を緩和・改善する——際に、大別すると「和解か正義か」という選択に直面する。和解という理念を反映する代表的な取り組みが「真実委員会(truth commission)」と呼ばれる活動であり、加害者の裁決を留保する代わりに、被害者から広く証言を聴取し、各地で公開フォーラムを開催し、過去に関する包括的な報告書を作成するところに特徴がある。一方で、正義を目標とするケースの多くは、国連主導の

下、外国人法曹関係者が関与する特別法廷を設置してきた。

本研究の対象社会として挙げている、アパルトヘイト後の南アフリカは和解を、クメール・ルージュ体制下の虐殺とその後の内戦を脱したカンボジアは正義を、それぞれ選択した社会として注目されている。

この「和解か正義か」の選択肢を中心に、補償および和解の促進、被害者支援、記録・記憶の保存、治安の改善といった分野で紛争後・移行期の社会が取り組む課題や方策を実証的・理論的に体系化してきた代表的な研究枠組が、「移行期の正義 (transitional justice)」研究である。Transitional という語が示すように、広範な武力行使の終焉は、そのまま民主的な体制の現前や「法の支配」の浸透につながるわけではなく、とりわけ社会規範・法秩序をめぐる諸問題を生起させることになるのである。

1990年代から徐々に発展してきたその研究枠組の内部では、近年になって「和解か正義か」という二分法では分析対象を適切に把握できないのではないか、という視点が提起されている。というのも、いずれの選択を採用しても、「(とりわけ外部社会の観察者・支援者が当初思い描いていたような) ゴールには到達しない」、あるいは「司法の正当性があらためて問題となる」といった共通点が認識されてきたからである。研究対象に対するこうした動向を踏まえ、本研究では「対照的な二つの社会を実証的に比較する」というアプローチを採用する。

また、社会学的な分析手法を持ち込むことで当該社会に特有の状況を把握し、従来、政治学的・法学的考察に限定されがちであった平和構築および「移行期の正義」の枠組に対して、新たな知見を提示することを目指す。

で表現しようとする社会・文化運動である。

これは宗教的背景から生まれ長く受け継がれて来た祭りではなく、起源もごく新しい祭りであるが、ここには「民族」を特別な象徴として掲げ、「民族」を新たな形で表現し自覚させることを目的の一つとしている点で、デュルケームの定義する意味での宗教性を見出すことができる。

日本では、1980年代に大阪で在日コリアンによって始められた「生野民族文化祭」、「ワンコリア・フェスティバル」、「四天王寺ワッソ」を出発点として、90年代以降多様な民族文化祭が展開し、今日約30にのぼる祭りが関西地域を中心に全国で開催されている。これらの祭りには、今日では日本人もそのスタッフに加わり、また、ブラジル、アルゼンティン、中国、フィリピンなどからのニューカマー住民も参加するようになっていく。民族文化祭は、その形態、主旨、実行グループは多様であるが、民族文化表現だけでなく地域における多民族・多文化共生を目標として掲げるものが多く、都市における新しいエスニック文化運動の形を提起している。

今年度は、これまでの筆者らの調査を踏まえ、民族祭りのネットワークングを通じた新たな住民意識形成と地域共生機能を明らかにしたい。

また民族文化祭は、世界的にエスニック・マイノリティが自らの民族性を確認し表現する運動として、多くの国々で行われている。コリアンの祭りとしては、米国、中国、ロシアなどの数都市で行われ、日系人の祭りは、アメリカ、カナダ、ブラジルなどで行われている。ただマイノリティとホスト民族、マイノリティ相互の連携、共生という点についてはいまだほとんど研究がなされていない。

今年度は、比較研究のための予備調査として、米国、中国、ロシア、ブラジルなどでの民族祭りの資料を収集しつつ、二か所を選んで現地研究を実施したい。

個人研究

民族文化祭の比較研究

研究代表者・教授 飯田 剛史
(社会学)

民族文化祭とは、エスニック・マイノリティの人々が、その民族文化をホスト社会の公共の場で祝祭の形

個人研究

京都北山の 地形・地質形成と文化

研究代表者・講師 鈴木 寿志
(地質学・古生物学)

京都市は周囲を山々で囲まれた盆地地形をなす。こ

の地形上の特徴と京都の文化形成との関連を考えるために、一つの例として「五山の送り火」の立地について調べてみたい。

五山の送り火は毎年8月16日のお盆の終わりに仏様をお送りするために行われる。送り火が炊かれる場所は、市内から見渡せられるように山の尾根や丘陵斜面が利用されている。東山の「大文字」、松ヶ崎の「妙法」、西賀茂の「船」、衣笠の「左大文字」、北嵯峨の「鳥居」。周囲を山々で囲まれた盆地地形がうまく利用されている。ではこれらの山々ほどのようにして形成されたのであろうか。中でも東山では研究が進んでおり、大文字山の形成過程がわかってきている (Nakamura, 1995; 鈴木ほか, 2007)。

東山の大文字は、送り火の中でも代表格である。送り火の火床は標高300~350mの尾根上に位置している。この大文字周辺の地質は花崗岩と泥岩からなる。中生代ジュラ紀に堆積した泥岩中に白亜紀の花崗岩マグマが貫入したことにより、花崗岩に接する泥岩が熱変成作用を被り、硬質なホルンフェルスに変化した。その後長い年月をかけて風化・浸食が進んだ結果、硬質なホルンフェルス部分が残り、他の軟質な部分が浸食・削剥されて低くなった。こうして形成された地形が大文字の尾根である。

ではその他の山・丘陵はどうであろうか。残念ながら詳細はあまりよくわかっていない。大局的には古生代ペルム紀~中生代ジュラ紀にかけて形成された丹波地体群の構成岩石からなっている。しかし個々の山・丘陵について詳しく検討されてはいない。

本研究では、五山の送り火の行われる山や丘陵の地質・地形形成過程を明らかにするために現地調査を行い、岩石の種類と分布、および地質年代を調べる。特にこれまであまりよくわかっていない大文字山以外の山・丘陵を調査対象としたい。岩石の種類を調べるためには、岩石薄片を作成して偏光顕微鏡下で観察する必要がある。地質年代を決めるためには、堆積岩に含まれる微化石(放射虫・コノドント)を検出しなければならない。これらの研究により、五山の送り火の立地について、詳しく知ることができるであろう。

文献 Nakamura, D. (1995): *The Island Arc* 4: 112-127.
鈴木寿志ほか (2007): 日本古生物学会2007年年会予稿集: 50.

個人研究

ダイエット行動の「三日坊主」に対する予防・教育的プログラムの実践的研究

研究代表者・准教授 田中 久美子
(社会心理学・教育心理学)

近年、生活習慣と精神的健康との関連性が示唆され、生活習慣の充実を目指す健康支援は、個人の現在の健康増進を促すだけでなく、将来的な有病率の低下や医療費削減にも寄与する重要な取り組みであるとの認識が広がりつつある。

本研究は、こうした今日的な動向を踏まえ、青年期女子の間に広がるダイエット行動を日常生活との関連で捉え、ダイエットの継続的実践により、自らの身体や健康への意識改善、健康行動の継続的能力向上を図る、集団型介入プログラムの開発に先立つ基礎的研究をなすものである。

そこで、本研究では、ダイエットの継続性を主要テーマとし、ダイエット行動の現状把握を目的とする。対象となる女子大学生をはじめ、若い世代におけるダイエットでは、不適切な目標設定や健康リスクへの認識不足から、即効性を求めて、無自覚的に心身に負荷のかかる方法を選択し、長期的な継続が困難となる場合も少なくない。しかし、従来の質問紙調査では、継続性という観点から、どのくらいの頻度や強度、期間で行われたかの具体的・縦断的なダイエット過程は把握し切れていない。また、数多のダイエット方法がブームのごとく出現する中、従来の研究で扱われてきたダイエット内容は時代への適合性という点でも限界が見える。

以上のことから、本研究では、女子大学生50名程度を対象に、大学入学以降、体重や体型を変える、あるいは維持することを目的として行った全てのダイエットについての基礎データを得るため、質的研究法を採用し、半構造化面接による個別の聞き取り調査を行う。生活観、健康観などの意識特性、健康状態、生活習慣などを含めたダイエット行動の現状および現代的課題を多面的に把握し、継続を阻害(あるいは促進)する個人的特徴や環境要因を特定する。これは、効果的な介入方法を策定する上での重要なプロセスとなる。その

後、グラウンデッド・セオリー・アプローチによる分析を行い、大学生が行うダイエットの特性や継続に関わる要因の類型化を試みる。

これまで、青年期女子のダイエット行動や瘦身願望は、摂食障害や抑うつなどの予測子となり、心身発達を妨げる問題的事象として論じられることが多かった。しかし、本研究では、ダイエットへの興味を、自己の身体への関心の高さと肯定的にとらえ、これを女性としての自己の身体や健康の価値への気づきに転化し、心身の適応への発展的な流れをつくる第一歩となることを期待している。

個人研究

世界史における 東アジアとアフリカ —国際共同研究のための基盤形成—

研究代表者・准教授 古川 哲史
(歴史学、比較文化・社会論)

アフリカは「歴史なき大陸」ではなく、とりわけ世界の歴史を理解するうえでは、アフリカ史への考察は欠かせない。もちろん現在の私たちの多くは、アフリカに歴史がなかったのではなく、なかったのはアフリカの過去を見ようとする意識や態度であり、旧来の科学や学問の方法論・制度であったことを知っている。「未開」であったのは、科学者の目のほうであった。

本研究はこうした問題意識を持ち、グローバル化が喧伝される現在、日本をはじめ東アジアとアフリカとの間にいかなる史的關係があったかを、政治や経済關係のみならず、文化的接触、人的接触も含めて明らかにすることを目的とする。本研究は、研究領域の空白を埋めるだけでなく、そもそもグローバルであるはずの世界史に、従来、アジアとアフリカの間で別々に扱われてきた諸相を繋ぐ接続性をもたらすことになる。また、本研究は国際的視点から見ても、世界史、アジア史、アフリカ史において未開拓なテーマあるいは十分明らかにされていない課題に取り組むものである。

本研究の具体的な活動は、申請者が現在まで取り組んできた〈第二次世界大戦期までの日本—アフリカ關係史〉の研究成果を出発点に、対象地域を日本から東アジア（主に中国、朝鮮半島、日本）にひろげて、19世

紀末から20世紀半ばにおける東アジアとアフリカの關係を明らかにすることである。理論かつ実証面（いくつかの重要な事例研究）での個人研究活動に従事するとともに、この大きなテーマを国際的な規模で論じるための国際共同研究を組織するネットワーク作りを試みる。

本研究計画と方法は、以下の三つの段階に分けられる。第一に、「先行研究の概観と検証」を行う。日本とアフリカの關係史研究にくわえて、先行研究は豊富ではないが、中国および朝鮮半島地域とアフリカとの關係史を論じた学術書や論文、研究（者）の動向などを調査する。そして、関連文献の入手、分析を行うとともに、可能な範囲で該当研究者と連絡を取り、情報交換などを行う。

第二に、「資料収集や分析、実証的考察」を行う。日本や外国における関連図書館、文書館などで資料調査に従事し、関係者への聞き取り調査なども開始する。

第三に、本研究は予備的性格を持つが、「研究成果の公表」（中間発表含む）を行う。申請者の所属する学会等で、中間発表的な口頭発表を試み、第三者の批評や意見を聞き、研究内容や計画・方法を再検討し、必要に応じて研究活動にそれらを活かす。また、研究成果を研究ノートや論文としてまとめ、所属学会等の学術誌に公表することを試みる。

海外研究調査報告

タイ国第一級王室寺院 ワット・マハータートユワラートランサリット所蔵 貝葉写本の共同研究調査

大谷大学 DB 研究 嘱託研究員 清水 洋平

大谷大学には、今から百年余り前、タイ王室寄贈とされるパーリ語貝葉写本（大谷貝葉）と略称）のコレクションが所蔵されている。その所蔵量は国内最大級であり、内外に誇る一大コレクションである。1985年に桜部建教授（当時）が総務委員となり大谷貝葉の目録編纂事業が開始され、内外の多くの研究者の協力のもと10年の歳月をかけて、大谷大学図書館編『大谷大学図書館所蔵貝葉写本目録』（1995年）として、目録の出版がなされた。その後、長崎法潤・吉元信行両教授（当時）が中心となり、その中の稀観文献についての研究が継続され、特に、東南アジア独自に展開したジャータカである『パンニャーサ・ジャータカ』（*Paññāsa-jātaka*）について、大谷大学真宗総合研究所が中心となり研究が始められた。その後、『パンニャーサ・ジャータカ』研究は、大谷大学真宗総合研究所パーリ語文献研究の休止に伴い規模は縮小するが、日本学術振興会科学研究費などの補助を通じ、10年以上に亘り継続的に研究が進められ、大乘経典との深い関係が明らかになりつつあるなど、現在も国内外の多くの研究者が参加する共同研究として発展し続けている。

このような中、一昨年度に大谷大学真宗総合研究所では「指定研究：大谷大学 DB 研究（チーフ：宮下晴輝教授）」へ大谷貝葉に関わる研究計画が移された。それは、長年の問題の一つであった「大谷貝葉コレクションについて、一般者が利用可能なデジタル化された画像データ資料がない」という状況に対して解決を図るためでもあった。現在、大谷大学 DB 研究では、今までに稀観文献と判明しているものを中心に大谷貝葉のデジタル画像データ化の作業を進めている。それと同時に、大谷貝葉における稀観文献の抽出作業を行なっている。

今回実施した調査は、タイ国の上座仏教の多数派であるマハーニカーイ派の総本山であり第一級王室寺院であるワット・マハータートユワラートランサリット（Wat Mahathat Yuwaratransarit）が所蔵する貝葉写本について、マハーチュラーロンコーン大学仏教学部長で

ワット・プラチュートウボンウィモンマンカラーラム（Wat Phra Chetuphon Vimolmangklararm：通称ワット・ポー）の Phra Suthitammanuwat（Ven. Dr. Thiab Malai）長老から共同研究調査の要請を受けたものである。ワット・マハータートユワラートランサリットは、アユタヤー王朝期（1351～1767）創建の古刹で、1788年にラーマ1世（在位1782～1809）の命により結集が行われた場所であり、ラーマ5世（在位1868～1910）の頃まで王族の遺体を安置する場所とされた寺院である。タイ国の寺院が所蔵する写本の多くは、各寺院に秘蔵されたままであり、手に取ることは勿論、見ることも読むことも写真撮影することも許可されることは殆どないのが現状である。この状況下でタイ国の由緒ある寺院が所蔵する貝葉写本の共同調査は、大谷貝葉の中の稀観文献の抽出作業を進める我々にとって、寺院にどのような文献が所蔵されており、どのような文献が写本のみしか存在していないのかを知るために、この上ない機会であった。

・調査日程：2010年2月5日（金）～3月6日（土）

*但し、大谷大学 DB 研究の業務は、2月20日（土）まで。終了後、続けて日本学術振興会特別研究員の業務を3月6日まで行なう。

・調査地：タイ王国首都府バンコク：プラナコーン区

・調査者：清水洋平（大谷大学 DB 研究・嘱託研究員、日本学術振興会・特別研究員）

*尚、他機関からの共同調査者として、舟橋智哉氏（東南アジア文献遺産日本保存会、真宗大谷派蓮泉寺）が同行。

2月5日（金）：午前、関西国際空港から出国し、現地時間15時30分、スワンナブーム国際空港に到着。その後ホテルに移動。

2月6日（土）：マハーチュラーロンコーン大学仏教学部長でワット・ポーの Ven. Dr. Thiab Malai 長

老と大谷貝葉コレクションについての意見交換並びに調査の事前準備、打ち合わせ。その後、ワット・マハータートユワラートランサリットにお連れ頂き、寺院側と調査の打ち合わせを行なう。(尚、研究協力者並びに通訳として、大谷大学で博士号を取得された Dr. Chaowarithreonglith Bunchird 氏が2月8日まで同行。)

2月7日(日): 午前、ワット・マハータートユワラートランサリットの Phra Somkiat 長老の協力のもと、調査・撮影作業の準備。午後、タイ国立図書館にて、関係資料の調査。

2月8日(月): 調査・撮影作業を開始(2月20日(出)まで、毎日8時30分から17時30分の間、貝葉写本が収蔵された厨子が保管されているウィハーン(講堂)から、寺院側が提供して下された作業場であるクティー(僧坊)に貝葉写本を運び入れ調査を実施。)

*調査日程の都合上、2月20日以降、3月5日までの期間中に、ワット・ポーの Ven. Dr. Thiab Malai 長老と次期調査対象寺院についての討議。その後、次期調査対象予定寺院であるトンブリー地区のパーンコークヤイ区に所在するワット・アルンラーチャワラーラーム(Wat Arunratchawararam(通称ワット・アルン):アユタヤー王朝期創建の古刹。ラーマ2世(在位1809~1824)の菩提寺であり、特徴的なバンコク様式の大仏塔をもつ第一級王室寺院)を訪問。同寺院と次期調査に関わる意見交換、打ち合わせを行なった。また、ワット・マハータートユワラートランサリットの住職ならびに関係者に調査終了の報告を行なった。(これらの打ち合わせについては、田邊和子氏(東方研究会研究員)、畝部俊也氏(名古屋大学大学院文学研究科准教授)、原田正美氏(大阪大学非常勤講師)、Nathinee Klamphonplook 氏(National Institute of Development Administration (NIDA))などの他機関の共同研究者と共に進めた。)

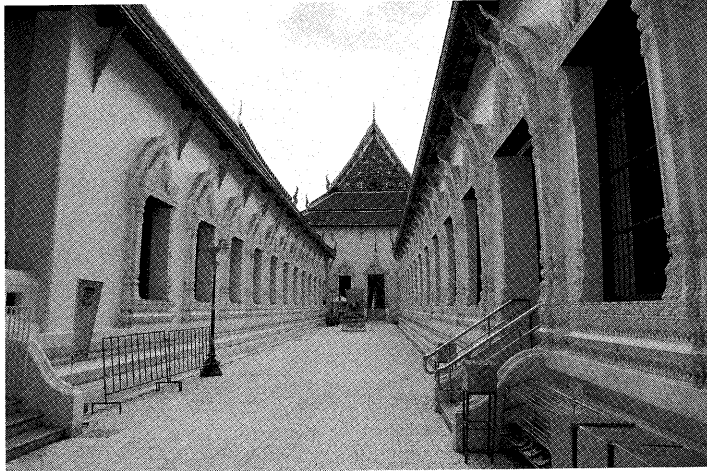
3月5日(金): ワット・ポーの Ven. Dr. Thiab Malai 長老と稀観文献についての意見交換。夜、スワンナプーム国際空港より出発。

3月6日(土): 朝、関西国際空港に到着。

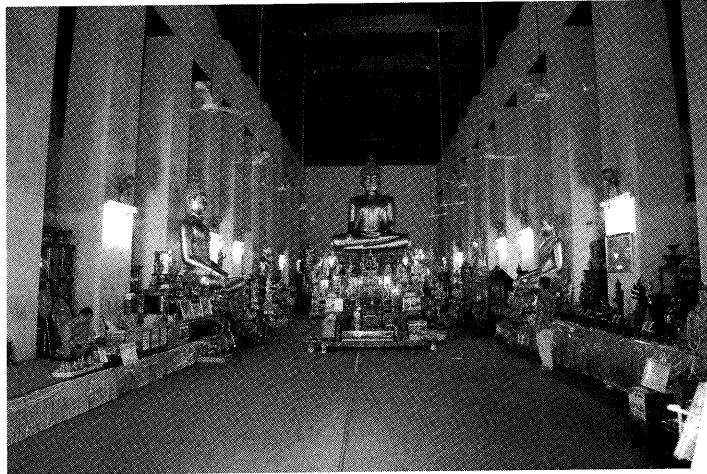
ワット・マハータートユワラートランサリットのウィハーン(講堂)内に保管されていた35基の厨子のうち、貝葉写本が所蔵されていた厨子は19基あり、それらの中に約700套の貝葉写本が所蔵されていた。それらの殆どはクメール文字で記されたパーリ語ないしパーリ語とタイ語が混交した形式で書かれているものであった。所蔵されていた貝葉写本の全体像としては、4分の1が Abhidhamma 七論に関する文献、5分の1は、Vinaya に関する文献であった。上記のような歴史的背景をもつ由緒ある寺院において、このように、所蔵されていた貝葉写本すべての調査が行なえたことは有意義であり、また、そのような機会に恵まれたことは大変貴重であった。

その他、タイ国中部地域において、現存する写本の多くはラタナーコーシン時代(1782~)のものであるが、同寺院ではアユタヤー時代後期である1600年代に書写された貝葉写本や、Sivijaya-jātaka、Vidagdhamukhamāṇḍana など、稀観文献と考えられるものも多数所蔵されており、大いに知見を広めることができた。そして、大谷貝葉コレクションの中にもみられる稀観文献である Paññāsa-jātaka、Mahābuddhagaṇa(偉大なる仏徳)や Ānisaṃsa(功果:御利益)に関する文献なども所蔵されており、これらの多くをデジタル画像資料として収集できたことも大きな成果であった。

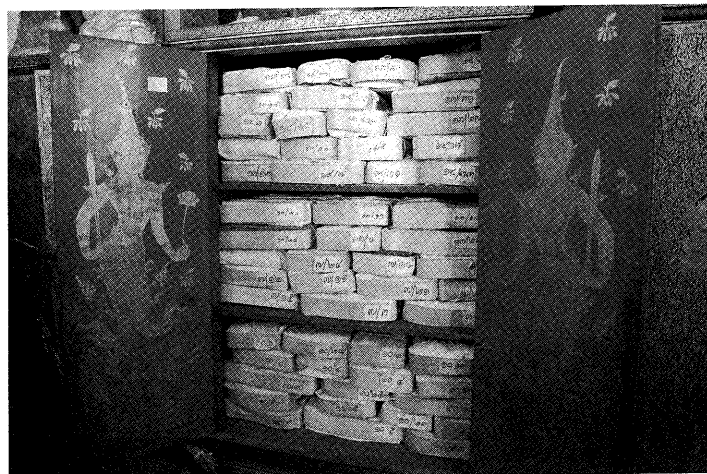
更に今回の調査で新たな発見があった。貝葉写本は套として纏められる時、貝葉写本の前後を木の板で挟むことが多い。この挟む木の板については、王室版のものなどの一部は、見事な装飾が施され、そのデザインは貝葉写本が所蔵されている寺院により、ある程度決まっていることが多い。そのような中、ワット・マハータートユワラートランサリット所蔵貝葉写本の数套の挟板に施されている装飾のデザインと、大谷貝葉の数套に施されている挟板の装飾のデザインとが全く同じなのである。大谷貝葉コレクションについては、その出自は「今から百年余り前、タイ王室寄贈」としかわかっておらず、更なる他の王室寺院所蔵の貝葉写本との比較が必要であるが、このことは、大谷貝葉コレクションの出自に関わる大きな手がかりとなると思われる。また大谷貝葉コレクションの特徴の解明につながると考えられるのである。今後、調査結果の分析、それを踏まえての研究の更なる進展が俟たれる。



ワット・マハータートユワラートランサリット寺院



ワット・マハータートユワラートランサリットのウィハーン（講堂）



厨子に収蔵されている貝葉写本

国内研究調査報告

真宗本廟（東本願寺）造営史に関わる調査報告

—真宗大谷派長浜別院大通寺の建築及び文書調査について—

真宗本廟（東本願寺）造営史研究・研究員 平野 寿則

真宗本廟（東本願寺）造営史研究班では、東本願寺移管資料の調査・研究を鋭意推進する一方、漸次、必要に応じて、関連する造営再建諸資料の収集、整理・分類等に努めてきた。今回は、昨年度の12月と3月の2度にわたって行った真宗大谷派長浜別院大通寺の本堂建築及び文書調査について、その内容と成果の概略を報告することとした。なお、今般の調査においては、大通寺輪番の篠岡誓法氏、主任の藤本光氏にご理解とご配慮を賜り、また長浜市教育委員会事務局教育総務課文化財保護センター主幹の二宮義信氏、長浜城歴史博物館学芸員の太田浩司氏、及び大通寺の管理・修復に携わる(有)橋本工務店の橋本市郎氏にもご協力・ご参加を頂いたことに厚くお礼を申し上げる。

まず、2度の調査日程について概要を示せば、下記の通りである。

2009年12月2日(水)

- 10:00～12:00 本堂建築調査(内陣)
- 13:30～15:45 本堂建築調査(小屋組と床下)
- 15:45～17:00 調査内容の確認と整理

12月3日(木)

- 9:00～13:00 大通寺文書仮目録等調査

2010年3月10日(水)

- 10:00～17:00 大通寺文書の調査と写真撮影
- 10:00～15:00 本堂建築の補足調査

今回の2度にわたる調査の目的は、第一に、東本願寺の旧御影堂を移築したとの伝承をもつ長浜別院大通寺本堂の建築調査を通じて、教如上人による慶長度の東本願寺創建から明暦・寛文度の両堂改築の諸相を探ると共に、第二に、その裏付けとなる文献史料を確認するため、本山との関係や両堂造営再建に関わる古記録・文書類の調査と写真撮影を行うものであった。

第1回目(12月2日と3日)の調査は、主として大通寺本堂の建築を対象とするものであり、具体的には、各種部材に残る墨書類、改築の確認、また部材の新旧判断等を通じて平面図を作成することを目的とし、本堂内陣・外陣、小屋組、床下部分の調査を実施した。本堂内

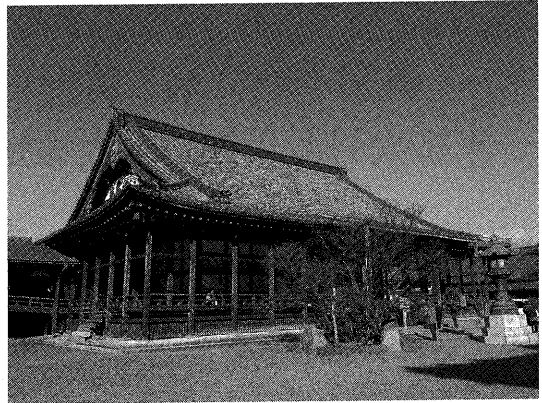
部については、内陣と外陣の構成が異なり、内陣においては部材を転用した痕跡が認められたため、とくに内陣部分を中心に、各所の採寸や古い部材の確認作業が行われた。内陣部分とは、正面を柵内、背面を後堂に接する部分で、奥行は三間となっており、中央正面の五間分が内陣である。その両脇には二間分の余間と、さらに余間の両脇二間分が飛檐の間である。内陣正面は、現在、五間分を三間均等に割っているが、江戸時代後期には、五間均等に割っていたことを確認でき、内陣の調査からは、それ以前に内陣が三間であった時期があったか否かが問題となる。この点については、後述する内陣床下部分の調査と合わせて、さらなる検討が必要となる。また、一箇所であるが、内陣と右余間境の内陣から二番目の柱頭部から墨書番付が見出された。

小屋組と床下部分の調査は、こうした内陣部分の構成の特徴をふまえて実施されたものである。小屋組の調査では、小屋組内に数多くの墨書番付を確認することができた。番付とは、建物の組み立て、また解体の時に、柱・梁・桁等の部材に付す符号であり、建物の平面上の位置を示すのに用いられる。確認された墨書番付は、組み合わせ番付と言われる方法で、縦軸には仮名文字、横軸に漢数字の番付が付されていた。一方、内陣柱の床下部分の調査からは、墨書番付とともに、彫り付けられた番付が確認された。こちらは時香番付と言う方法で、端から柱の筋ごとに方向を変えて蛇行しながら番付されるものである。今回の調査で確認された番付類は、本来、内陣部分がどのような構造物だったのかを窺い知る手がかりとなると同時に、大通寺の移築伝承の解明、さらに初期東本願寺の造営・改築の諸相との関連において重要な示唆を与えてくれるものである。

第2回目(3月10日)の調査では、前回12月3日の大通寺文書の仮目録調査を受けて、主に東本願寺の造営再建に関する諸資料の写真撮影を行った。なお、並行して本堂建築(内陣部分)の補足調査を実施した。大通寺文書については、前回『大通寺史』の関係箇所からの撮影であったため、今回は予め仮目録より関係諸資料を抽出し、長浜城歴史博物館寄託の大通寺資料についても調査・撮影が行われた。

具体的には、「御本山回祿の御書」「御本山御焼失二付御布告」「焼失跡江仮御堂御造立御遠忌御執行之儀二付申達覚」「御本山御両堂御建築石寄進帳」「御本山両堂礎石之義二付書付」等、焼失再建に関する史料をはじめ、両堂の図面、遷座・法要の記録、諸事書留の諸資料全39点について調査を取り、写真撮影を行った。一方、今回の調査では、大通寺本堂の建立に関する由緒等の記録類も調査の対象としたが、関係する諸資料を見出すことはできなかった。

いずれにしても、今回の2度にわたる大通寺の本堂建築及び文書調査で得られた知見を早急に整理して、『本願を受け継ぐ人びと—真宗本廟（東本願寺）造営史—』に活用していかねばならない。



真宗大谷派長浜別院大通寺本堂

学術交流協定締結

中国社会科学院歴史研究所との学術交流協定締結について

国際仏教研究（中国班）キャップ・教授 浅見直一郎

中国に特別な関心をもたない人でも、天安門の名を知らないということはないであろう。かつての紫禁城、現在の故宫博物院の正門であり、毛沢東の肖像と「中華人民共和国万歳」「世界人民団結万歳」の標語が掲げられた姿は、南側に位置する広大な天安門広場とともに、首都北京を代表する景観となっている。

この天安門と天安門広場の間を走る大通りを長安街といい、北京市街を東西に貫く交通の大動脈である。長安街の幅員は70mを超え、地上は片側5車線の車道のほかに広い歩道を備え、地下には地鉄1号線、すなわち北京で最も混雑する地下鉄が走る。沿道には中国の政治、経済、文化の各方面を代表する重要な建物が建ち並ぶ。長安街は、北京で最も重要な街路であるといつてよい。

中国社会科学院は、長安街を天安門から東へ約2.8km、長安街がかつての城壁と交わる建国門の少し手前に位置し、街路の北側に南面して建つ大きな建物である。もっとも、現在長安街の周辺ではきらびやかな高層建築が次々と建てられているから、その中であって社会科学科学院の建物は、大きいことは大きい、いささか古めかしい印象を受けることは否めない。しかし、古め

かしいのは、中国社会科学院がそれだけ早く設立された、歴史ある存在であることを示す。設立からしばらくの間、周囲には他に大きな建物はなく、社会科学科学院のビルが聳え立っていたという。

中国社会科学院の設立は1977年5月、初代院長は中央政治局委員をつとめた胡喬木であった。中国政府（國務院）に直属し、中国における哲学・社会科学の最高研究機関として位置づけられており、現在では研究所31、研究センター45を擁し、研究者を含む全職員数は4200人を越える。

今回、本学の真宗総合研究所と学術交流協定を結んだ歴史研究所は、31の研究所の中の一つで、中国社会科学院の設立以前から、中国科学院哲学社会科学学部所属の研究所として存在していた歴史を持つ。歴史研究所とは言っても、同じ社会科学院の中に世界歴史研究所が別にあることからわかるように、その主たる研究対象は中国史（中外関係史や中国内の少数民族の歴史を含む）である。研究所内には、先秦史・秦漢史・三国南北朝隋唐宋元史・明史・清史・中外関係史などの研究室がある。ずいぶん不均衡な編成であるが、最初から計画的に設置されたのではなく、必要に応じて分

離・独立させていったために、このような形になったものらしい。

今回の協定は、双方の研究者の間で昨年の夏ごろから話が持ち上がり、それぞれの所属先での承認、相互の調整などが進められ、2010年3月9日に北京の中国社会科学院で締結式を行なう運びとなった。大谷大学側の責任者は乾源俊・真宗総合研究所長（当時）であるが、今後実際に交流事業を担当するのは国際仏教研究の中国班なので、班の研究員である桂華淳祥教授と浅見とが、乾所長のサインの入った協定書を携えて北京へ赴いた。

締結式には、中国側の代表者である劉栄軍・歴史研究所筆頭副所長（所長は現在空席）をはじめ、卜憲群副所長、王震中副所長、楼勁科研処処長など、現在の歴史研究所の幹部クラスの先生方がほぼ全員出席された。調印のあと、ご挨拶に代えて大谷大学の沿革や研究の特徴などをお話する機会があったが、重だった先生方に聞いていただけたのは幸いであった。

締結式の後、歴史研究所の中堅・若手の研究者の方々と懇談会をもつことができた。中国側のリーダーは、日本留学の経験をお持ちの黄正建・隋唐宋元研究室主任で、「50歳以上は私だけです」と挨拶された。懇談会で

は日本の研究状況のほか、「真宗総合研究所では何を研究しているのですか」「大谷探検隊と大谷大学とは関係があるのですか」「大谷大学と龍谷大学との関係は」など、非常に具体的な質問が次々に出された。こういったことが、海を隔てるとかえってわからなくなるようである。桂華教授と縷々説明をしたところ、「永年の疑問が解けました」と非常に感謝され、面はゆい心持ちがした。

なお、今回の協定締結の前後に、一部視察と交渉を兼ねて、歴史研究所中外関係研究室の烏雲高娃（オユンゴア）副研究員（准教授に相当）、聶静潔・助理研究員（助教に相当）、科研処の博明妹・助理研究員が来日され、本学の公開研究会でご報告いただいた。その題目等については彙報欄をご参照いただきたいが、今回が初来日の聶さんは、大谷大学図書館の蔵書が充実していることを大層喜ばれ、多くの時間を図書館と研究所での文献調査に充てておられた。歴史研究所でも、研究員（教授に相当）クラスの人はい日経験のある方が多いが、副研究員・助理研究員の来日はなかなか難しいとのことであった。今回の協定が今後永く継続し、とくに若い研究者の希望をかなえる機会となることを願うものである。



中国社会科学院歴史研究所会議室にて 劉栄軍副所長（左）と浅見

公開講演会報告

“French and Japanese Cooperation in Buddhist Studies”

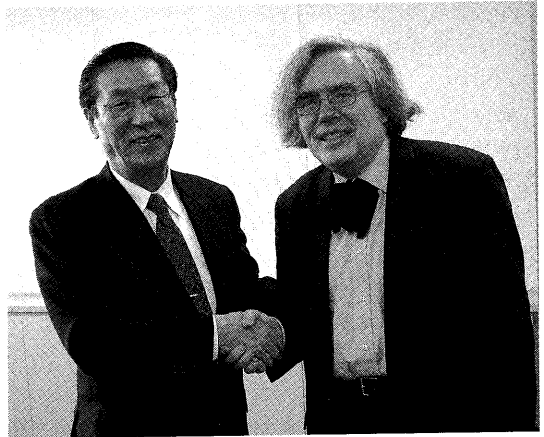
(仏教学におけるフランスと日本との協力)

国際仏教研究・研究補助員 圓山 亜美

国際仏教研究班は、去る2009年12月17日に響流館3階マルチメディア演習室にて、パリ国立高等研究学院教授ジャン＝ノエル・ロベール氏をお迎えし、「French and Japanese Cooperation in Buddhist Studies (仏教学におけるフランスと日本の協力)」という講題で、講演会を開催した。

ロベール氏は、フランス碑文・文芸アカデミー会員であり、現在国際仏教大学院大学客員教授もされている。1998年には国家博士論文『九世紀初期に於ける日本天台宗の教義—義真と法華宗義集』で、日仏両国においてそれぞれ相手国の文化に関してなされたすぐれた研究成果に対して贈られる、渋沢・クローデル賞を受賞。1997年には、宗教伝統の創立する土台をなす經典の鳩摩羅什訳『法華経』をフランス語に訳した『Le Sūtra du lotus』を出版。また雑誌『Nouvel Observateur』の別冊として執筆した“Petite histoire du bouddhisme”は、フランス人を仏教に惹きつける先駆的役割を果たした。ほかに“La Centurie du Lotus-Poèmes de Jien” (Institut des Hautes Etudes Japonaises, 2008)、日本語の著作として『心の「寺」を覗く—あるフランス人の仏教学者の見た仏教』(佼成出版社、1995)などがある。

廻ると氏はカトリック教育の中で育ち、子どもの頃から言語と宗教に大変な興味を持ち、思春期に(1960年代初め)ヘブライ聖書のフランス語訳と出会い、さらにその興味を深めた。同時に言語への興味から独学で中国語を学び、後に仏教に興味を持つに至る。決定的になったのは、恩師のベルナル・フランク博士との出会いであるとおっしゃっている。フランク博士から仏教研究における統一的观点、つまり仏教がインドで生まれ、中国で独特な発展を経て、高麗を通じて日本へ伝わった、それを統一して仏教であるということをお教えされたと言う。そしてご自身の日本留学の経験の中で、元大谷大学学長の安藤俊雄博士から大いに学んだことも語っておられた。特に安藤先生の著書『天台学：根本思想とその展開』(平楽寺書店、1968)に啓発を受け、天台学研究の方向性を見出すことができた。また氏は、文学は文章をゆっくり読む技術であり、言語が基本となるが、文学・言語学は、同



ジャン・ノエル・ロベール教授(左)と木村前学長 於 学長室

じ学問であっても「科学」ではない。ゆえに翻訳や注釈における意味の「ずれ」(例えば天台の論義にみられるような)に注意を払った研究が大事であり、仏典翻訳について文献学は理解を深めるための大切な道具であると言う。ややもすれば仏教学＝文献学と捉えがちな私たちにとって、大きな啓発となった。

また、特に米英で1980年代に盛んであった、政治・経済・社会・文学・人類学・哲学などのさまざまな学問的観点から領域的に横断しながら研究する“Cultural Studies”の方法による仏教研究の捉え方に対して、氏は懐疑的であるように思われる。明治以降、南条文雄・笠原研寿の二人が渡英して、日本においてサンスクリット語による新しい仏教研究の方法論が提示されたが、エティエンヌ・ラモート教授の「学問的に完璧な客観性のあるそれらの諸業績を前にしたとき、その人の全生涯を仏教に捧げているような一人の人間の、かれ自身の思想は、それではどのようであるのかと、自分に問題にしてみなければならぬ」(『仏教学序説』「緒言」2頁、平楽寺書店、1961)という言葉を引き合いに出し、仏教学を学ぶ日本の研究者自身の思想(宗教心)はどうなるのかと、現在いっそう顕在化している根本的な問題について言及された。宗学と言えば、それぞれ宗派内の信仰の色合いが強く、主体的な面が強調されているように理解される。金子大栄は「真宗の教義の学び方

は、徳川時代の伝承を経て、その問いも答えも予定観念の中ですでに固定してしまっているような真宗学となった」(前出、4頁)と嘆いているが、氏は自らの専門である天台の宗学が宗学の中で自己完結してしまっている問題(具体的には関口真大の「五時八教は天台教判に非ず」(『印度学仏教学研究』4 1 (21-1)、1972)という論文から端を発した、天台教学研究における「天台の五時八教は智顛の教えであるか、否か」についての論争)を挙げつつ、果たして日本において伝統的になされてきた宗学としての仏教が、「客観的研究」になれるのか、また宗学としての蓄積は、宗学内部での客観性があるのではないかと、ご自身の考えを述べられた。主体的な信仰よりも客観性が求められる昨今の研

究方法において、いかに批判的・合理的な成果としての研究がなされても、仏教の伝統を汲み、一人の仏教者としての思想がないようなものであってはならないという課題を私たちに与えてくれたと言える。氏の指摘は、真宗学・仏教学を中心とした本学の学問研究のあり方に通じるものがあり、大いに刺激的な講演であった。

講演後、質疑応答の時間を設けられ、講師と参加者による活発な質疑のやりとりがあり、フランス・日本と国は違うが、仏教を通じて交流が図られ、お互い協力し合うことを確認し、盛会のうちに講演会は終了した。



「公開講演会」講師：ジャン・ノエル・ロベール教授 2009.12.17. 於 マルチメディア演習室

研究成果報告会

2009年度「指定研究」研究成果報告会

真宗総合研究所主事・准教授 山本 和彦

2010年3月3日(水)16:00-17:30に響流館3階マルチメディア演習室において、2009年度「指定研究」研究成果報告会を公開で行った。木村宣彰前学長をはじめ、研究所委員会の委員、各研究班の研究員など多数の出席者があり盛況であった。6つの指定研究の8研究班が、各15分間の報告を行った。

- 1 「大谷大学親鸞聖人750回御遠忌記念特別指定研究」
報告者：研究員・チーフ・門脇健教授
(1)御遠忌記念論集『親鸞像の再構築：親鸞を訪らう』の出版を2010年度中に行う。
(2)公開講演会の成果報告として、『親鸞像の再構築』第四輯を研究所から発刊した。
(3)論文執筆予定者を招いて公開講演会を開催した。
(4)前回御遠忌以降の50年間(1961-2011)にわたる親鸞研究を概観するためのデータベース並びに文献目録の作成を行っている。

- 2 「国際仏教研究」英語班
報告者：研究員・井上尚実准教授
(1)*An Anthology of Modern Shin Buddhist Writings* の出版に向けて出版社(SUNY Press)と交渉中である。
(2)佐々木月樵「大谷大学樹立の精神」の英訳作業を進めている。
(3)公開講演会を5回開催した。

- 3 「国際仏教研究」独仏班
報告者：研究員・藤枝真准教授
(1)マールブルク大学神学部ディートリッヒ・コルシュ教授の『マルティン・ルター』(原題：*Martin Luther: Eine Einführung*)の翻訳作業を進めている。
(2)2010年5月5、6日にパリのフランス国立高等研究院において開催するシンポジウムで発表する内容を検討する研究会を開いた。

- 4 「国際仏教研究」中国班
報告者：研究員・キャップ・浅見直一郎教授
(1)大谷大学所蔵「東本願寺旧蔵資料」海外布教関係部分の資料一覧作成
(2)中国東北師範大学との共同研究「中国華北・東北・東部モンゴル地域の宗教と文化」の推進

- (3)中国社会科学院歴史研究所との共同研究の推進

- 5 「西藏文献研究」
報告者：研究員・チーフ・福田洋一教授
(1)大谷大学図書館所蔵チベット語文献のデータベース化、電子テキスト化
(2)OUTLK (Otani Unicode Tibetan Language Kit) のサポート
(3)共同研究の実施
(4)寺本婉雅資料の研究

- 6 「大谷大学DB研究」
報告者：研究員・柴田みゆき准教授
(1)北京版チベット大蔵経のデジタル化
(2)パリ語葉のデジタル化
(3)真宗関係文化財のデジタルデータ化

- 7 「真宗本廟(東本願寺)造営史研究」
報告者：研究員・平野寿則准教授
(1)造営史全体像の把握
(2)史料調査・収集
(3)史料翻刻
(4)国内調査
(4)公開講演会・執筆者会議・編集会議

- 8 「真宗同朋会運動研究」(和田稠氏の寄付金による特別研究)
報告者：研究員・チーフ・水島見一教授
(1)同朋会運動の年表作成・資料収集・分析
(2)公開研究会の開催
(3)聞き書き調査の実施

報告会には、将来の研究者である大学院生や研究所の研究補助員など期待された参加者が少なかった。この点が非常に残念であった。このような報告会に参加することで、他の領域の研究成果を知ることができる。それによって自らの専門領域を拡げていくという日々の努力によってこそ、本学研究所の理念である「真宗による学問の総合化」が成し遂げられると信じている。2009年度はマルチメディア演習室での開催となったが、

2010年度はさらにたくさんの参加者を期待して、マルチメディアホールで開催する予定である。



「指定研究」研究成果報告会で挨拶する木村宣彰前学長 於マルチメディア演習室

特別研究員研究成果報告

日本で発見されたオリヤー語『マハーバーラタ』の研究

特別研究員 DASH Shobha Rani

はじめに

筆者は2005年度から大谷大学真宗総合研究所に特別研究員として所属している。以下はその間に行なった研究成果である。

インド東部・オリッサ州で造られた『マハーバーラタ』の貝葉写本の一部が十数年前に日本の愛媛県津島町で発見された。現在、この貝葉写本は「津島貝葉」と名づけられ、宇和島市教育委員会 津島支所 教育課の管轄下に置かれている。管見の及ぶ限りでは、これは、オリヤー文字・コロニー (karaṇī) 書体でオリヤー語を書き表した貝葉写本としては日本に現存する唯一のものである。

大谷大学名誉教授の長崎法潤先生及び当時龍谷大学講師の柏原信行先生によってその最初期の研究調査が行なわれた。筆者も後にその研究調査の一員に加わり、以来今日に至るまで、当貝葉写本の研究を続けてきた。2008年度より日本学術振興会から科学研究費補助金を受け(基盤研究(C))・「日本で発見されたオリヤー語『マハーバーラタ』の研究」・2008年4月～2011年3月まで)、本貝葉写本のローマ字転写テキスト(Diplomatic Edition)および校訂テキスト(Critical Edition)の完成を目指して研究を続けている。

「津島貝葉」について

この「津島貝葉」は江戸時代中期(18世紀)ごろに伝えられた可能性があると思われる。これは、オリッサ出身の15世紀半ばの有名な詩人サーララーダーサ(Sāraḷādāsa)によって著わされ、『サーララー・マハーバーラタ』(Sāraḷā Mahābhārata)として知られている『マハーバーラタ』のオリヤー語版である。しかし、この「津島貝葉」は『マハーバーラタ』の完全版ではなく、「森林章」の第1部(Mahābhārata Āraṇyaka-parba prathama-khaṇḍa)のみに相当するものである。これはオリヤー文字・コロニー(karaṇī)書体を使用した中世オリヤー語で書かれており、その書写年代は17世紀初頭と考えられている。大きさは46.4×2.7～3.8cm(横×縦)からなる長い写本である。各葉の代表的行数は4行である。両面記載で221葉からなる膨大な写本ではあるが、それでも、『マハーバーラタ』全体から見ると10分の1に過ぎない。奥付がなく、最初と最後に竹の夾板が付

いている。

文字の形や書き方が所々異なっているため、複数の人(少なくとも3人)によって書写されたと思われる。全体として標準的な中世オリヤー語で語られており、各行の末尾で韻を踏む伝統的な詩の形で書かれている。面白いことに、所々に西オリッサの方言も見られるので、書写した人の中に西オリッサ出身者がいたのではないかと考えられる。

詩人サーララーダーサについて

当写本の詩人サーララーダーサの生涯は明確に知られていないが、彼は15世紀半ばごろに叙事詩『マハーバーラタ』のオリヤー語版(すなわち『サーララー・マハーバーラタ』)を書き始めていたことが知られている。本名はシッデシュアル・パリダー(Siddheśvara Parīḍā)であった。彼はシュードラカースト(śūdra)の人であって、聖者(ムニ)のような人物であったため「シュードラムニ」(シュードラカーストの人であるが聖者のようなお方)と呼ばれていた。正式の教育を受けたことがなく、サンスクリット語もできなかったようであるが、サラスワティー女神(Sarasvatī)の恩恵によって詩才が恵まれたと伝えられている。このことは、この「津島貝葉」及び彼の多くの作品に述べられている。それゆえ、彼は自分のことを「サーララーダーサ」つまり「サーララー女神(サラスワティーの別名)の僕(しもべ)」と呼んでいる。

「津島貝葉」の内容

本貝葉写本はガネーシャ神への祈願文で始まる。物語はアガステイ(Agasti)聖者が語り手となってパイバスタ・マヌ(Baibasuta Manu)王の質問に次々と答えていく構成となっている。最初の物語はパンダバ(Paṇḍaba)兄弟が従兄のカウラバ(Kauraba)兄弟とサイコロの試合をするところから始まる。その結果、パンダバ兄弟が負けて罰として13年間森へ行って生活することが物語の中心であり、その間に生じた様々な出来事が詳細に描かれる。例えば、バルシュラーマ(Parsurāma)の誕生と彼の両親への深い愛情の話、アルジュナ(Arjuna)の息子アビマニュ(Abhimanyu)の誕生の話、ナフシャ(Naḥṣa)王がインドラになったのち蛇にされた話、カ

ルナ (Karna) 王とハリシュチャンドラ (Hriścandra) 王の誓いの話、ヒラナ・カパチャ (Hiraṇa Kapaca) 鬼によるジュディステイラ (Judhiṣṭhira) の誘拐、アルジュナによるヒラナ・カパチャ鬼の殺害、鶴に身を変えたダルマ (Dharma) 神とジュディステイラの哲学的な討論、ビーマの息子バリバーラーラ (Baṛibelāla) とカウラバ軍の戦い、ドラウパディー (Draupadi) の五人の息子の誕生、カルナ王誕生の話、ガンガー女神 (ガンジス川) が地上に降りて来て人々を救った話、アルジュナによるニクンバ (Nikumbha) 鬼の殺害など有名な出来事が述べられている。アルジュナによってニクンバ鬼の殺される話が当貝葉の最後の物語となっている。

本研究の現在までの主な成果

本研究では、オリヤー語『マハーバーラタ』の貝葉写本(『津島貝葉』)の内容を、オリッサ文化庁 (Department of Culture, Government of Orissa)(1966年)及び Dharmagrantha Store (1900~2000年) によって出版された、詩人サーララーダーサによるオリヤー語の『マハーバーラタ』を参考にしながら、その全体の物語の構成を解明し、各物語ごとに題名を付けて、組み立てを明らかにした。そのために先ず写本の解読に取り組んだ。貝葉写本の解読を遂行するには、関連文献の整理・読解が必要不可欠である。ゆえに、それらを写本解読のための関連諸文献の基礎作業と位置付け、その上でオリヤー語『マハーバーラタ』の「津島貝葉」の解読を行なった。

上記の既刊のオリヤー語『マハーバーラタ』の出版される以前に「津島貝葉」が日本に伝えられていたという事実から、その出版に際して参考にされた貝葉写本の中にはそれが含まれていなかったことに疑問の余地はない。本研究によって、その既刊の『マハーバーラタ』と「津島貝葉」の類似点及び相違点が明らかになった。

「津島貝葉」はオリヤー語『マハーバーラタ』の10分の1程度を占めるので、「津島貝葉」の全体像を明らかにするために、作成地オリッサ及びその他の大学図書館・研究所などに足を運び、できる限りその同系統の貝葉写本の存在を確認した。結果として、現在のところ2本の同系統(つまり年代が同じで、同一の著者であり、同一部分で言語と書体が同じ)の貝葉写本の存在を確認できた。

そして、筆者は2010年1月~3月末までハイデルベルグ大学南アジア研究所古典インド学科 (Department of Classical Indology, South Asia Institute, Heidelberg University) より客員教授として招聘された。「津島貝葉」

を初めとし、当大学の図書館に保管されている、400本以上のオリッサの貝葉写本について同学科のM. Maithrimurthi 先生と共同研究を行なった。滞在期間中、大谷大学大学院研究科長小谷信千代教授も当研究所を訪問し、1971年より行なわれているオリッサの貝葉写本研究並びにインドの文化と宗教の研究について様々な情報を交換した。古典インド学科の学科長 Axel Michaels 教授は今後大谷大学と共同でオリッサの貝葉写本を用いてインドの文化、宗教の研究をしていきたいとの意向を伝えられたので、今後のオリッサの貝葉写本のより幅広い共同研究が期待される。

本研究の成果を多くの研究者に報告し、できるだけ多くの意見を参考にし、より良い研究ができるように、以下の学会や研究雑誌などで公けにした。

1. 日本印度学仏教学会、2006年(学会発表)。
2. 「日本で発見されたオリヤー語の『マハーバーラタ』について」『印度學佛教學研究』第54巻、第2号、日本印度学仏教学会、2006年3月、241頁~244頁。
3. “Palm Leaf Manuscript of Mahābhārata in Oriya Discovered in Japan”, *the Indian Archaeological Studies* (『インド考古研究』), Indian Archaeological Society, No. 28, Tokyo, 2007, pp. 103-111.
4. 日本印度学仏教学会、2009年(学会パネル発表)。
5. 「日本に現存するオリッサの貝葉写本」、*Synergy* (Ratha Yatra 〈ラタジャトラ〉記念誌)、2009年6月、Odisha Community Japan, Tokyo.

最終的には本研究の成果を集大成し刊行する予定である。

本研究の価値

日本における『マハーバーラタ』研究の殆どは、サンスクリット語テキストに基づくものに限定されている。インドでは、『マハーバーラタ』がサンスクリット語だけでなく、様々な地方言語でも残されている。しかし、それらの多くは、サンスクリット語で書かれた『マハーバーラタ』の単なる翻訳ではなく、それぞれの地域の文化に沿った形で地方化されたテキストである。「津島貝葉」もサンスクリット語『マハーバーラタ』の単なる翻訳ではなく、オリヤー化された『マハーバーラタ』なのである。叙事詩の中の登場人物や地名などがオリッサ独自のものとなっており、あたかも物語の舞台がオリッサであったかのように読者に思わせる。例えば、『マハーバーラタ』の主人公の一人クリシュナ神は、オリッサの守り神ジャガンナータ神と同一視されている。さらに、クリシュナ神は現在のウツタル・プラデーシュ州のマトゥラー近辺で活躍していたとされているが、

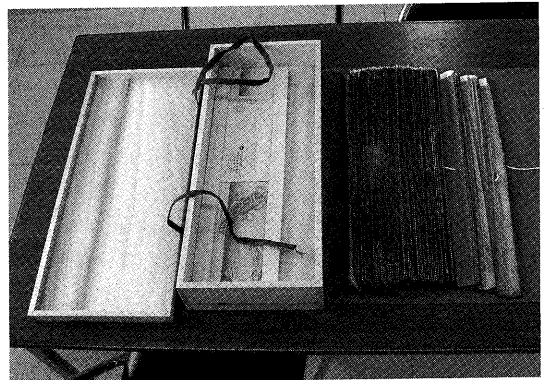
「津島貝葉」のクリシュナ神はオリッサ出身になっている。他にも、オリッサの有名な川の名前（バイトラニー、チトラトパラ、プラーチーなど）やオリッサ独自の料理の名前（アーンピロ、マフロ、バジャーなど）も見られる。これらは、できる限り叙事詩『マハーバーラタ』をサンスクリット語の能力を有しないオリッサの一般の人々に馴染ませるための作為であったと考えられる。

おわりに

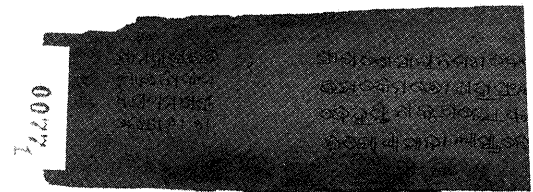
以上のように「津島貝葉」は、日本に存在する唯一のオリヤー語・文字の貝葉写本であり、インド学や写本学の方面からはもちろんのこと、日本とインド東部との交流をも示す貴重な伝統文書でもある。当貝葉写本の内容は世界的に有名なインドの叙事詩『マハーバーラタ』の一部であるため、インド、特に15世紀～17世紀のインド東部・オリッサ地域の文化、宗教観、オリヤー語文献の状況などが本研究によって明らかになるであろう。

さらに、インドの中でもオリッサの貝葉写本は素材、作成方法、保存方法、形態などに関して独自性を持っている^①。「津島貝葉」は現在でもオリッサで維持されている伝統技法によって作製された貝葉写本である。それゆえ本貝葉写本は、『マハーバーラタ』の文献学的な研究のみならず、写本学（manuscriptology）の研究に関しても新たな知見を加えるに違いない。

①詳細は拙論「インド・オリッサ州の貝葉写本の特徴について」『仏教学セミナー』第85号、大谷大学仏教学会、京都、2007年、13～23頁を参照されたい。



桐箱に保管されている「津島貝葉」
宇和島市教育委員会・津島支所・教育課 所蔵



「津島貝葉」の1葉目の一部



共同研究についての懇談会

(右から)
ハイデルベルグ大学インド古典学科長 Axel Michaels 教授、
小谷信千代名誉教授、筆者

真宗総合研究所彙報 2009. 10. 1～2010. 4. 30

■研究所関係

◎真宗総合研究所委員会

- ◇12月9日(水) 12時10分～(博綜館5階第4会議室)
 1. 2010(平成22)年度「一般研究」の選考について
 2. その他
- ◇2月18日(木) 16時30分～(博綜館5階第5会議室)
 1. 真宗総合研究所関連規程について
 2. その他
- ◇3月10日(水) 13時～(博綜館5階第3会議室)
 1. 2009(平成21)年度「指定研究」の研究成果について
 2. 2010(平成22)年度「指定研究」の研究計画について
 3. その他
- ◇4月13日(水) 12時10分～(博綜館5階第4会議室)
 1. 2010(平成22)年度「指定研究」追加人事について
 2. 同 「指定研究」の研究計画について
 3. 同 「科研」採択に伴う「一般研究」追加採択について
 4. 同 「科研」採択に伴う「一般研究」特別研究員人事について
 5. 同 その他
- 「指定研究」研究成果報告会
- ◇3月3日(水) 16時～(響流館3階マルチメディア演習室)
 1. 2009(平成21)年度「指定研究」研究成果について
 2. 2010(平成21)年度「指定研究」研究計画について
 3. その他

■特別指定研究

大谷大学親鸞聖人750回御遠忌記念特別指定研究

- ◇12月1日(水) 16:10～17:40(真宗総合研究所ミーティングルーム)

第22回研究会

 - ・御遠忌記念論集について
 - ・文献目録の作成について
- ◇2月26日(金) 15:00～17:00(響流館3階マルチメディア演習室)

第1回論集執筆者研究会

報告者: 安富信哉(大谷大学特任教授 嘱託研究員)

講題「親鸞の往生観」

: 延塚知道(大谷大学教授 研究員)

講題「『歎異抄』と『教行信証』」

- ◇3月17日(水) 14:00～16:00(響流館3階マルチメディア演習室)

第2回論集執筆者研究会

報告者: 草野顕之(大谷大学教授 研究員)

講題「親鸞伝における史実と伝承」

: 池上哲司(大谷大学教授)

講題「倫理と宗教の限界」

なお、上記研究会の他、研究員同士による論集編集会議を随時行ってきた。また、文献目録作成のための会議並びに作業を日常業務として行っている。

■指定研究

国際仏教研究

〈英語班〉

《研究会》

- ◇佐々木月樵「大谷大学樹立の精神」翻訳研究

第6回研究会 10月20日 17:00～19:00

(真宗総合研究所内ミーティングルーム)

第7回研究会 11月17日 17:00～19:00

第8回研究会 12月15日 17:00～19:00

《会議》

◇近代教学英訳アンソロジー出版関係

出版に使用する肖像写真(清沢満之・曾我量深・金子大栄・安田理深)の選定

2010年4月2日 15:30～17:00

(真宗総合研究所内フリースペース)

《公開講演会》

①11月26日(水) 14:30～16:00

於: マルチメディア演習室(響流館3F)

講師: William Waldron氏

(ミドルベリー大学教授)

題目: 脳は孤立した島ではない:

宗教経験の間主観的な構築をめぐる仏教と
認知科学の対論

②12月17日(水) 14:30～16:00

於: マルチメディア演習室(響流館3F)

講師: Jean-Noël ROBERT氏

(フランス高等研究院教授)

題目: 仏教におけるフランスと日本との協力

〈ドイツ・フランス班〉

《研究会》

1. 2010年5月5、6日にフランス国立高等研究院（パリ）にて開催するシンポジウム“National Identities and Religion: A French-Japanese Comparative Approach”にむけて、各研究員が発表する内容を検討する研究会を開いた。

○2009年12月3日 17:50～(真総研ミーティングルーム)
ロバート・ローズ チーフ “Buddhism and the State in Early Japan: The Case of the Tendai School”
藤枝真研究員 “Indoctrinating the Younger Generation: A Strategy of Yasukuni Shrine for the Propagation of Patriotism.”

○2010年1月7日 17:50～(真総研ミーティングルーム)
番場寛研究員 “Essai sur le discours religieux dans le Japon contemporain- Autour des noms et du nembutsu.”
村山保史研究員 “State and Religion in the Thought of Daisetsu Suzuki.”

○2010年2月24日 12:30～(真総研ミーティングルーム)
井上尚実研究員 “Transformation of Japanese Buddhism during the 19 Century: Focusing on the Impact of the Meiji Restoration and the Persecution of Buddhism.”
飯田剛史研究員 “Nationalism of Japanese Today: co-existence and exclusion.”

○2010年4月8日 17:50～(真総研ミーティングルーム)
シンポジウム開催に関する詳細事項の打ち合わせを行った。

〈中国班〉

- ①大谷大学図書館所蔵「東本願寺旧蔵資料」海外布教関係部分の資料一覧作成

すでに調査が終了した中国東北地域に引き続き華北地域関連の綴資料（仮番号19～25）および華中地域関連の綴資料（仮番号26～）の目録作成作業を継続中。

- ②中国社会科学院歴史研究所との共同研究の推進

1) 本研究所と中国社会科学院歴史研究所との研究協定締結に先立ち、2009年12月14日(月)～20日(日)、オユンゴア中国社会科学院歴史研究所副研究員、博明妹助理研究員を招聘し、浅見直一郎研究員、桂華淳祥研究員、松川節研究員とともに本学にて研究活動を行い、公開研究会を開催した。

12月18日(金) 16:10～18:00

(於:響流館3階 マルチメディア演習室)

○朝鮮司訳院の蒙学訳官について一訳官の養成と語学力を中心に一

中国社会科学院歴史研究所 オユンゴア副研究員

○中国東北のエウエンキ族について

中国社会科学院歴史研究所 博明妹助理研究員
2) 本研究所と中国社会科学院歴史研究所との研究協定締結および研究調査のため、2010年3月6日(土)～3月10日(水)、浅見研究員、桂華研究員の二名は中国北京市に出張。劉栄軍副所長との協定締結式に臨むとともに、隋唐宋元史研究室主任黄正建研究員をはじめとする研究者13名と懇談、それぞれの研究テーマについて情報や意見を交換した。また北京大学図書館および薊県の独楽寺などにおいて仏教に関する史料・史跡の調査を実施した。

3) 本研究所と中国社会科学院歴史研究所との研究協定により、2010年3月12日(金)～21日(日)、オユンゴア中国社会科学院歴史研究所副研究員、聶静潔助理研究員を招聘し、浅見直一郎研究員、桂華淳祥研究員、松川節研究員とともに本学にて研究活動を行い、公開研究会を開催した。

3月16日(火) 15:00～17:00

(於:響流館3階 マルチメディア演習室)

○ハンゲル制定におけるパスパ文字の影響

中国社会科学院歴史研究所 オユンゴア副研究員

○『悟空入竺記』版本研究

中国社会科学院歴史研究所 聶静潔助理研究員

西藏文献研究

《研究者招聘》

ロプサン・モンラム師（セラ・メー学堂、インド在住亡命チベット人僧）

期間：2009年10月10日～2009年11月8日

チベット文字フォント作成に関わる技術交流と共同研究をおこなった。

《公開研究会》

◇10月14日(火) 午後6時～

於:響流館3F演習室1

目片 祥子「初期サキャ派の歴史：サチェン・クンガニポを一例として」

福田 洋一「チベット語翻訳の諸問題」

◇10月27日(火) 午後5時50分～

於:響流館3Fマルチメディア演習室

ロプサン・モンラム「チベット文字の歴史とそのIT化」

◇11月4日(水) 午後6時～

於:響流館3Fマルチメディア演習室

ロプサン・モンラム「チベットの仏教絵画について」

◇12月15日(火) 午後6時～

於:響流館4F会議室

伴 真一朗「武威のチベット仏教寺院とその碑刻史料について：白塔寺 (Tib. shar sprul pa

sde)の現地調査報告を中心に」

三宅伸一郎「ボン教聖者伝研究の諸問題」

◇2010年1月26日(火) 午後5時15分～

於：響流館3Fマルチメディア演習室

村上 徳樹「シャーキャチョクデンの自己認識解釈」

野村正次郎「ツォンカパの空思想における実体と真実」

《研究打合せ》

◇4月12日(火) 午後4時20分～

於：真宗総合研究所ミーティングルーム

「2010年度西藏文献研究班第一回ミーティング」

大谷大学 DB 研究

《事務連絡会議》

◇2月22日(月) 14:00～15:30

議 題：2010年度活動予定についての打ち合わせ

場 所：真宗総合研究所ミーティングルーム

《学会参加》

◇3月19日(金) 10:00～17:10

参加者：柴田みゆき

学会名：「東洋学へのコンピュータ利用」

第21回研究セミナー

場 所：京都大学人文科学研究所(新館)

1F ガラス張りセミナー室

主 催：京都大学人文科学研究所附属東アジア人文
情報学研究センター

《機材設置及び説明会》

◇3月3日(水) 12:00～14:00

場 所：響流館4Fメディア編集室内撮影室

機 材：Phase One (6500万画素)、

・カメラ部—ハッセルブラッド503CW、

・レンズ部—カールツァイス(120mm他2本)

Apple Macintosh Mac Pro (タワー型)、

Apple Macintosh ノート型一台

専用ソフト

・Capture One (Phase One 専用ソフト)

・Adobe Photoshop

・Microsoft Office 2008

ナナオ社製 EIZO ColoeEdge、

NIKON D3X、撮影台、

ストロボ・4灯蛍光管式2台1セット

・フラッシュ式2台1セット

参加者：宮下晴輝、柴田みゆき、山本貴子

説明会社：日本写真印刷株式会社

《出張》

◇2009年10月9日(土)、10月16日(金)

出張者：清水洋平(嘱託研究員)

出張先：国際仏教学大学院大学、名古屋大学

目 的：フランス極東学院 (École Française d'Extrême-Orient: EFEO) 特別研究員 Dr. Peter Skilling 氏による東南アジアで記されたパーリ語貝葉写本についての研究会に参加。

◇2009年11月6日(金)～11月7日(土)

出張者：清水洋平(嘱託研究員)

出張先：日本教育会館、駒沢大学会館

目 的：第59回東方学会シンポジウム並びに2009年度パーリ学仏教文化学会研究例会に参加し、諸研究者と大谷大学所蔵貝葉写本についての意見交換。

◇2010年2月5日(金)～3月6日(土)

*但し、大谷大学DB研究の業務は、2月20日(土)まで。

終了後、続けて日本学術振興会特別研究員の業務を3月6日まで行なう。

出張者：清水洋平(嘱託研究員)

出張先：タイ王国バンコク

目 的：タイ王国第一級王室寺院 Wat Mahathat Yuwaratransarit 所蔵の貝葉写本に関わる共同研究並びに打ち合わせ会議。

◇2010年3月17日(水)～3月18日(木)

出張者：清水洋平(嘱託研究員)

出張先：三会寺(神奈川県横浜市港北区鳥山町)

目 的：高野山真言宗金剛峰寺末寺である三会寺が所蔵するパーリ語貝葉写本の調査。

真宗本廟(東本願寺)造営史研究

2009年度の研究計画と編集計画に基づき、執筆の促進を目標に活動を推進した。公開研究会と執筆者会議を開催して、執筆状況や問題点を報告いただき、『本願を受け継ぐ人びと—真宗本廟(東本願寺)造営史—』の内容の深化と原稿化を目指した。それとともに、報告原稿の読み合わせと、関連する翻刻史料の読み合わせをおこない、全体の整合性と内容の整理を図った。また、必要に応じて関連諸資料の調査や資料収集をおこない、執筆・編纂に必要な諸史料の翻刻作業を進めた。

《事務連絡会議》

◇11月6日(金) 13:30～15:00

議題：①今後の研究・編纂体制について

②長浜・大通寺調査について

③史料翻刻の状況について

④その他

場所：真宗総合研究所ミーティングルーム

◇12月24日(金) 10:00～12:00

議題：①代替執筆依頼の状況について

- ②執筆の促進について
- ③大通寺建築調査の報告と資料再調査について
- ④その他、年度内の資料調査について
- ⑤その他

場所：真宗総合研究所ミーティングルーム

◇2月24日(金) 14:00~16:00

- 議題：①2010年度の編纂体制と出版計画等について
- ②第13回公開研究会開催に向けて
 - ③大通寺及び青木馨氏所蔵史料調査について
 - ④その他

場所：真宗総合研究所ミーティングルーム

《全体会議》

第12回公開研究会（第13回全体会議）

◇12月14日(月) 13:30~16:00

議題：①講演会

題目：平成の御影堂修復を通じて明らかになった事について

講師：八木 清勝（建築文化研究所代表）

- ②今後の研究・編纂予定について
- ③連絡事項

第13回公開研究会（第14回全体会議）

◇3月5日(金) 16:00~18:00

議題：①研究報告

題目：大坂本願寺の隆盛

報告者：安藤 弥

（囑託研究員・同朋大学講師）

- ②2009年度研究成果報告
- ③真宗本廟（東本願寺）造営史研究の今後の体制について
- ④『本願を受け継ぐ人びと』の編纂計画について
- ⑤その他

場所：響流館3階マルチメディア演習室

《編集委員会》

第3回編集委員会

◇3月5日(金) 15:00~15:45

議題：①2009年度研究成果報告

- ②真宗本廟（東本願寺）造営史研究の今後の体制について
- ③『本願を受け継ぐ人びと』の編纂計画について
- ④その他

場所：真宗総合研究所ミーティングルーム

《報告原稿読み合せ会》

第9回報告原稿読み合せ会

◇10月9日(金) 15:00~19:00

場所：真宗総合研究所ミーティングルーム
第10回報告原稿読み合せ会

◇1月29日(金) 14:00~19:00

場所：真宗総合研究所ミーティングルーム
第11回報告原稿読み合せ会

◇2月3日(金) 14:00~16:30

場所：真宗総合研究所ミーティングルーム
《資料読み合せ会》

第1回資料読み合せ会

◇11月20日(金) 14:00~18:00

場所：真宗総合研究所ミーティングルーム
第2回資料読み合せ会

◇11月27日(金) 14:00~18:00

場所：真宗総合研究所ミーティングルーム
第3回資料読み合せ会

◇11月27日(金) 13:30~16:00

場所：真宗総合研究所ミーティングルーム
第4回資料読み合せ会

◇12月18日(金) 15:30~18:00

場所：真宗総合研究所ミーティングルーム
第5回資料読み合せ会

◇1月20日(木) 13:00~15:00

場所：真宗総合研究所ミーティングルーム
第6回資料読み合せ会

◇2月11日(木) 15:00~17:00

場所：真宗総合研究所ミーティングルーム
《調査》

長浜別院大通寺本堂建築調査

◇12月2日(木)・3日(木)

真宗大谷派長浜別院大通寺（滋賀県長浜市元浜町32-9）

内容：東本願寺の慶長度御影堂の移築とも伝える大通寺本堂について、内外陣、小屋組、床下部における墨書類の調査や部材の新旧判断、部材に残る痕跡調査を実施。大通寺所蔵史料仮目録及び『大通寺史』の閲覧調査を実施。

田中家資料調査

◇8月上旬~10月上旬

東本願寺和敬堂

内容：仏師・彫師田中文彌関係の史料の調書作成、写真撮影、袋へのラベル添付を実施。その後、調書の目録化を完了した。

長浜別院大通寺所蔵資料調査

◇3月10日(木)・11日(木)

真宗大谷派長浜別院大通寺（滋賀県長浜市元浜町32-9）

長浜城歴史博物館(滋賀県長浜市公園町10-10)

内 容:東本願寺及び大通寺の造営史に関わる文献
や図面類の基礎調査と写真撮影を実施。

圓尾家文書調査

◇2月16日(火)

姫路市立城内図書館(兵庫県姫路市本町68-258)

内 容:東本願寺明治度再建時の網干港における献
木用材回漕関係資料(複写)の調査・収集。

青木馨氏(真宗大谷派蓮成寺)所蔵資料調査

◇3月26日(金)

青木馨氏宅・真宗大谷派蓮成寺(愛知県碧南市)

内 容:東本願寺造営史に関わる文献や絵図類の調
査と写真撮影を実施。

《その他》

長浜別院大通寺本堂建築調査報告会

日 時:1月20日(水) 9:30~12:00

場 所:真宗総合研究所ミーティングルーム

報告者:伊藤 延男(嘱託研究員・神戸芸術工科大
学名誉教授)

真宗同朋会運動研究

《事務連絡および定期研究会》

◇2009年度:毎週火曜日 14:30~17:40(4・5限)
定期的に各分担の進捗状況の報告と確認し、方向性
を検討する会議を行った。

◇2010年度:毎週月曜日 13:00~16:10(3・4限)
研究会、調査のテープ起こしとその成文化、そして、
内容の位置づけを行うため、読み合わせを実施して
いる。そして、来年度の出版に向けての確認会を行っ
ている。

《公開研究会について》

2009.10.1~2010.4.30の期間については、下記の日程
で行った公開研究会のテープ起こしとふり返りを中心
に展開している。

4月10日 二階堂行邦先生(専福寺・前住職)

テーマ:真宗同朋会運動の意義を考える

6月2日 信楽峻磨先生(龍谷大学名誉教授)

テーマ:真宗同朋会運動に学ぶ

6月5日 下田正弘先生(東京大学大学院教授)

テーマ:真俗二諦の現代的意義

6月9日 近藤章先生(長崎・すみれ保育園園長)

テーマ:真宗同朋会運動と大地の会

6月18日 マイケル・パイ先生(大谷大学客員教授)

テーマ:親鸞思想と現代社会の危機

一無関心・無倫理の行き詰まり
からどう出るか

7月7日 阿満利磨先生(明治学院大学名誉教授)

テーマ:同朋会運動の成果と課題

2010年度の前定としては、上田閑照先生、亀井廣氏等
(日程未定)をお招きし、公開研究会を行う予定である。
《聞き書き調査の実施》

聞き書き調査の実施は、本研究の中心課題であり、主
に門信徒の方々に行う調査である。

本調査は、「聞き書き」という手法の特性から、1件あ
たりの調査時間に膨大な時間を要する。そのため
2010.4までに、全国各地で10件の調査を行った。詳細
な調査内容については、ここでは省略させていただく。
また今年度の聞き書き調査の前定としては、名古屋、北
陸方面から2、3名への実施を予定している。

大谷大学史資料室

【他大学との交流】

・2009年10月14日~16日

全国大学史資料協議会2009年度総会ならびに全国研究
会

於 國學院大學渋谷キャンパス・国文学研究資料館

参加者 大畑博嗣(研究補助員)

・2009年12月4日

全国大学史資料協議会西日本部会2009年度第4回研究
会

於 住友史料館・泉屋博古館

参加者 大畑博嗣(研究補助員)

【調査等】

・2010年2月4日~5日

「全国大学史展 日本の大学 ―その設立と社会―」
(会場:明治大学博物館特別展示室)の展示見学、慶
應義塾福澤研究センター(慶應義塾大学内)・早稲田
大学 大学史資料センター(早稲田大学内)の施設
見学

目 的:全国大学史資料協議会東日本部会が主催する
展覧会「全国大学史展 日本の大学 ―その
設立と社会―」の見学と、昨年から継続して、
当資料室が所蔵する資料の保存・公開方法
等を参考にするために、他大学・他研究機
関の視察研修を行う。

参加者 大畑博嗣(研究補助員)

上記の活動以外にも、大谷大学史資料室では、資料室
所蔵文書・写真資料の再調査・長期保存作業を進める
一方で、資料の閲覧・貸出や質問などへの対応等日常
業務として行った。

■人事 (2010年4月1日付)

研究所長 (新)藤嶽明信 (旧)乾 源俊

□特別研究員

* デイ・マッシモ・ダイアナ (Dimassimo Daiana)

研究期間 2010年1月1日～2011年3月31日 (新規)

研究課題 「真宗大谷派の現代的発達」

指導教員 加来雄之教授

* 中井信介

研究期間 2010年4月1日～2013年3月31日 (新規)

研究課題 「東南アジア大陸部におけるモン族の生
業活動の動態」

指導教員 高井康弘教授

* スターリング ジェシカ ダウン (Starling Jessica Dawn)

研究期間 2010年4月1日～2011年3月31日 (延長)

研究課題 出家者の家族:「お寺の女性たち」と近現
代浄土真宗における伝統と変化

指導教員 佐賀枝夏文教授

* 小谷信千代

現 職 本学名誉教授

研究期間 2010年4月1日～2011年3月31日

研究課題 ポタラ宮所蔵ステイラマティの俱舎論註
釈書『真實義』の新出梵文写本研究

* 白館戒雲

現 職 本学名誉教授

研究期間 2010年4月1日～2012年3月31日

研究課題 チベット仏教における論理学の研究

* 朴 珣 英

現 職 本学任期制助教

研究期間 2010年4月1日～2011年3月31日

研究課題 フレデリック・ダグラス晩年のマスキュ
リニティ言説とアメリカ社会における人
種表象

* 林 千宏

現 職 本学任期制助教

研究期間 2010年4月1日～2011年3月31日

研究課題 ルネサンス詩におけるアレゴリーの変容
—ロンサールからキリアンへ—

* ダシュ・ショバ・ラニ (Dash Shobha Rani)

現 職 本学非常勤講師

研究期間 2010年4月1日～2011年3月31日

研究課題 日本で発見されたオリヤー語『マハーバー
ラタ』の研究

研究所報 第56号

2010年5月1日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒603-8143 京都市北区小山上総町

Tel. 075-411-8498 Fax. 075-411-8435